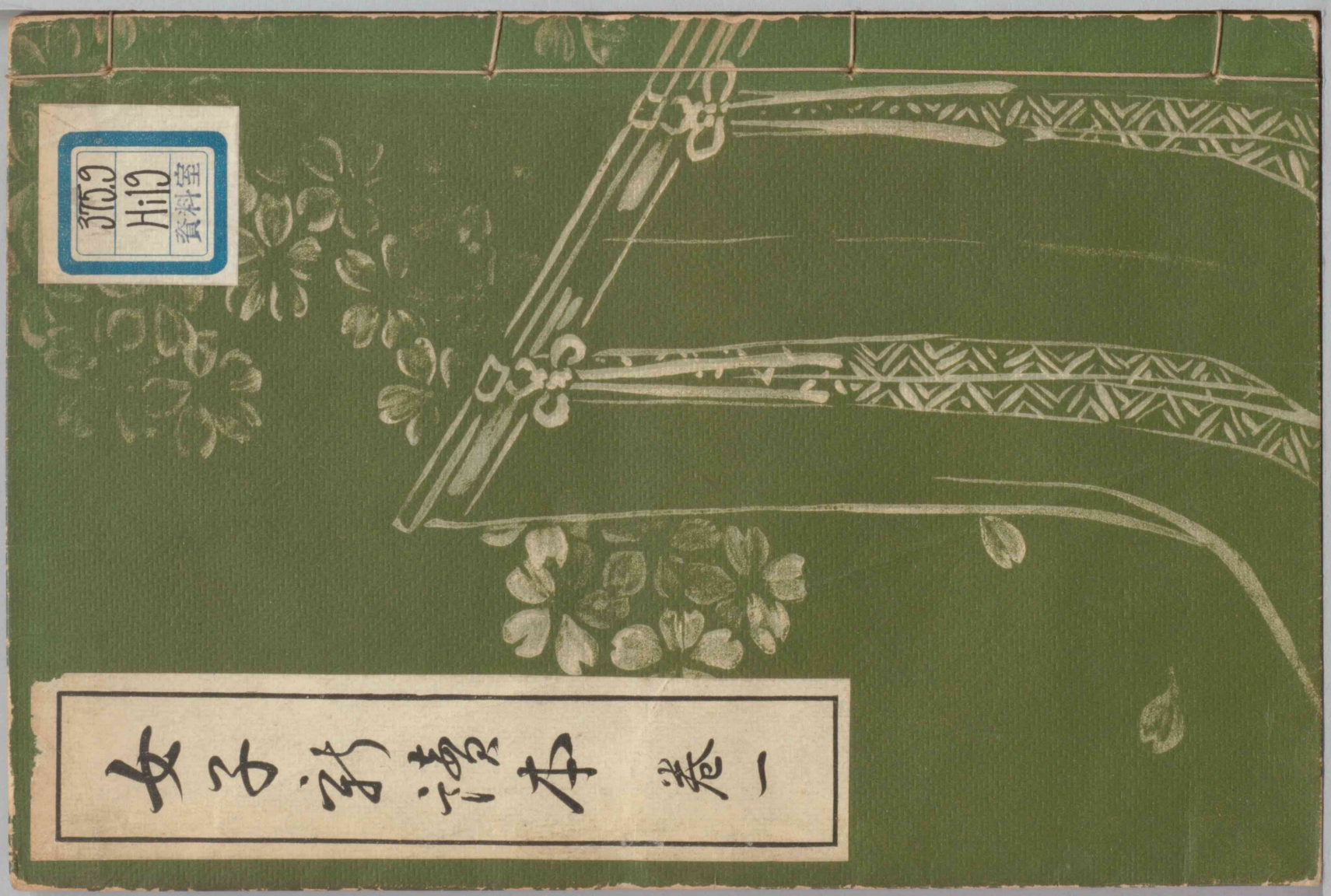
42222
教科書文庫
4
810
42-1926
200030
1723

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



370.9
Hi19
資料室

資料室
375.9
Hi 19

文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書　日一十二月十年五十正大

東京帝國大學助教授　文學士　久松潛一編

新讀本

東京　至文堂

廣島大學教育學部
中等教科書協會
廣島大學教
35908
圖書

編纂の趣旨

一　現代の要求の聲はいろ〳〵響いてをります。その中に、女子教育振興の聲が著しく聞えてをります。永い過去に於て、人間のあらゆる活動に甚だしかつた男性偏重の傾向は、慥に現代の國家に、社會に、家庭に又文化に可なり多くの弊を遺してをります。女子教育振興に關する現代の要求は、この弊に鑑みたものと思ひます。本書は、編者がこの現代要求の聲に耳を傾けて、その要求を充たす一助としようとする志から編纂したものであります。編者は、我が日本女性活動の世界を過去よりも一層廣く見、一層高く求めて、その活動に必須なる、我が傳統精神を經と

し、現代精神を緯とし、この經緯の絲をば我が古代より現代に至る國文學の優秀なる形態を以て彩ることに、出來得る限りの力を致しました。これが、本書組織の大綱であります。

二　女學校では「女らしい」女性の養成を、その教育の目的とされてをります。性別の教育の認められる以上、男性には男性らしき、女性には女性らしき教育を要求すべきに相違ありますまい。が、その「女らしい」といふことはどういふことでせう。平安時代には平安時代の女らしい貴族婦人がありましたが、又武家時代の武家女房を武家時代の女らしい女性でなかつたとは誰がいひ得るでせう。一般に考へられてゐる「女らしい」といふことは、時代と共に移るものと考へられます。現代の要求する女らしい女性とはどういふものでせうか。これを國語讀本の關るべき範圍に限定して考へれば、優雅・典麗・清淨などの秀れた情操を有つことは、その最も著しい要求であると思はれるのみならず、これが永久變らざる女性の本質上の要素であるに相違ありません。本書は教材の選擇に當つて、最もこの點に苦心してあります。

三　傳統精神に關して古典文を採擇したことは、言ふまでもないことであります。が、それと共に、傳統精神を新時代の言葉の中に溶かし込んである、明治以後の文章の採擇に意を用ひました。そして、編者は、どちらかといへば、後者に依る方が教育的効果の一層多いことを信じて、教材選擇上の方針を立てました。

四　現代文の重視されることは、我が國語教育界の新勢であります。編者も亦これに同感を表する一人であります。唯無制限・無方針なる現代文採擇は、動もすれば國語教授を危險なものとする危惧を抱き、同時に徒に教授者の手を煩はすことの多きを思うてをります。是に依つて、本書は現代文學と國語教授との交渉するいろ〳〵な點を考察して、徒に作家の多くを網羅することを避けて、一定の見地から作家を嚴選し、それと共に、各作家から一篇位を選んで、その文章の見本を併列するが如き編纂法を避け、各作家に就いて數篇を採つて、これを全卷中適當に配置することにいたしました。

五　現行讀本には教材の量に一定した所がありません。編者は、

文章内容の理解・會得の重視される現勢に鑑みて、餘りに多量を採ることは、寧ろこの大勢に逆行するものなることを考へて、これを本書の如く定めました。

六、本書が四號活字を採用したことも、編者に於て相當考慮を費した結果であります。中に、十數篇特に十二ポイント活字を使用してあるのは、生徒自習用として編入した爲ではなく、文字・單語・句節の分解的教授の必要なく、章意・全文意の把捉及び思想・感情上の指導、文學上の鑑賞に重點を置いて授くべき性質の文章として採用したからであります。

七、採錄した文の作家諸氏には、編者はかねて敬意を有つてをりますが、こゝに特に滿腔の感謝の意を表し、併せて時に教科用書

の立場から、擅に抄錄・改竄を加へた僭越の罪を寛假して下さることを切願いたします。

八　本書の編纂に就いて、藤村作博士が特に指導・教示を賜はつたことを明記して、厚く感謝の意を表します。

大正十五年六月

編者識

女子新讀本　卷一

目次

一　春景……高濱虛子……一
二　鸚鵡（韻文）……河井醉茗……五
三　嚴島……大類伸……七
四　太陽と風（劇）……坪內逍遙……二
五　忠實……島崎藤村……一九
六　義勇（一）……菊池寛……二五
七　義勇（二）……菊池寛……三二

八　東宮殿下の御著英……二澤荒田芳徳節藏…三八
九　星日記……百田宗治…四六
一〇　笛……小島政二郎…五一
一一　白い曙（韻文）……三木羅風…五九
一二　返らぬ日（一）……鈴木三重吉…六二
一三　返らぬ日（二）……鈴木三重吉…七〇
一四　麥秋……德富蘆花…七五
一五　朝の庭……高濱虛子…七九
一六　父の著物……薄田泣菫…八三
一七　母と蘆……西條八十…八六
一八　安宅……坪内逍遙…九一

一九　雷の話……原田三夫…九八
二〇　七夕祭……吉田絃二郎…一〇四
二一　月見草……阿部次郎…一〇八
二二　小さな笠……吉屋信子…一一
二三　大震災の記（一）……加能作次郎…一一八
二四　大震災の記（二）……加能作次郎…一二四
二五　大震災の記（三）……加能作次郎…一三一
二六　芙蓉の花（韻文）……西條八十…一三九
二七　こゝろ……北原白秋…一四一
二八　松風……上司小劍…一四七
二九　秋を待ちながら……相馬御風…一五一

三〇　月の話……長田幹彦…一五八
三一　秋草……金井紫雲…一六一
三二　夕顔……西條八十…一六六
三三　絶頂の雲……吉江孤雁…一六八
三四　詩四篇……千家元麿
(一)　朝……一七六
(二)　夜……一七七
(三)　空……一七九
(四)　海……一七九

目次終

廣島大學圖書之印

女子新讀本　卷一

文學士　久松潛一　編

一　春景

蝙蝠傘を持つて家を出る。麥畑に白い蝶が飛んで居る。白い蝶は麥畑の上を唯彼方此方と飛んで居る。何を尋ねて斯く飛び渡つてゐるのだらうと思ふ。菜の花畑にも飛んで居る。花にとまつてゐるのもある。羽搏きながらとまつてゐるのが、漸く離れ飛ぶ。暫く空中に舞つてゐて、ま

た花の梢になげつけるやうにとまる。かかる事を何度となく繰り返してゐる。蝶には別に棲家といふものが無い。西に飛べば其の處が其の時の棲家である。東に飛べば其の處が其の時の棲家である。時々刻々に變つて行く。

後ろの山には處々に山櫻が隱見してをる。松の樹が並び立つて居る間に一つの門が見える。其處は誰かの別莊であらう。小高く山を登つたところに、甍が木の間隱れに見える。鶯の聲が何處からともなく響いて來る。

蝙蝠傘をたゝむ。煙のやうな春雨は外套の袖にかゝる。佇むと川のさゝやきが聞える。

十坪許りの水溜りが道傍にある。よく見ると、こゝに格

別な世界がある。芹が生ひ茂つてゐるのは尋常の事として、大根の花や菜の花やが水中に咲いてゐる、薊の花も咲いてゐる。これはこの水溜にうち棄てられた雜草の中に大根や菜があつて、それが春に逢うて斯く花をつけたものであらう。蝌蚪（おたまじやくし）が其の水底に澤山居る。白い石の沈んで居る、其の上に數を盡くして群がつて居る。一寸足音が響くと狼狽して逃げ騷ぐ。

一聲コロと鳴く音がする。すると、あちらからもこちらからも、コロ〳〵コロ〳〵と張り合ふ。暫く張り合つて、やがて靜かになる。これは蛙であらう。初蛙とでもいふのであらう。

誰の別莊か。邸内は數千坪もあらう。周圍の垣はかなめ垣になつて居る。數十間に亘つて居る其の垣の上に一面に數十本の櫻が花をつけて居る。

其の前の畑の畦には蠶豆が咲いて居る。紫色の中に一點黑い色をつけた蠶豆の花が密集してついて居る。其の中に蝶が一匹とまつて、たゝけども覺めぬものの如く喰ひ入つて居る。豌豆の花が一株交つて居る。薄赤の瓣の下に眞赤な小さい瓣を垂らしてゐるのが際立つて目につく。

其處の一枚の田の底がごう〳〵と鳴つて居るのはどうしたのかと見ると、田の水が土龍の穴に流れ込んでゐるのである。

トンネルをぬけて、廣い別莊の横手に出る。煙のやうな雨がなほ降つてゐる。

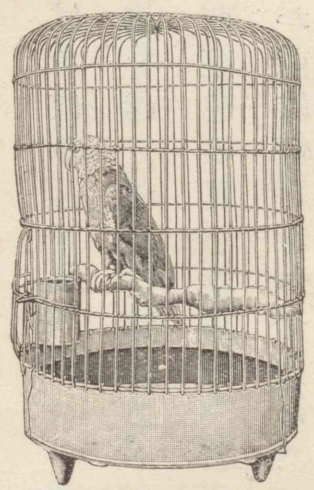
（高濱虛子*）

*名は清　俳人　小說家

二　鸚鵡

はるばると
海を越えて來た鸚鵡よ。
葡萄色の翼を收めて
お前は何を考へてゐる。
こゝろもち首をかしげて、
しづかに
お前は何を聞かうとしてゐる。

鸚鵡や、鸚鵡や、
よく來たね、
遠い海を越えてよく來たね。



心配することはない。
わたし達は
お前を大事に、大事にして
まもつてやる。
私たちの言葉が
お前にわからないのか。
何をそんなに不思議さうな顔をして考へてゐる。
世界がちがふのか。

こゝもお前の世界だよ。
お前がどんなに考へても
わからない世界だよ。
でも、安心しておいで、
誰もお前にわるくはしないから。
いつまでも考へてゐるより
早くおもしろい言葉を覺えてごらん。

（河井醉茗*）

*名は又平　詩人

三　嚴　島

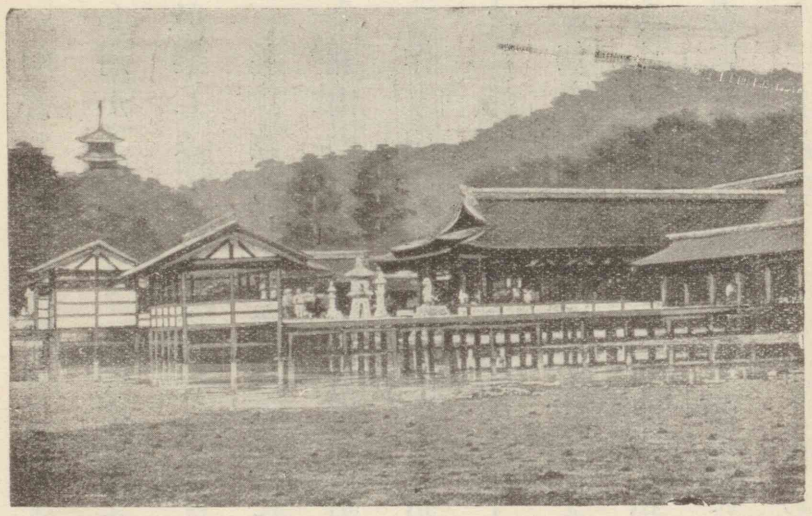
潮の速い幅八町の海峽を白く塗り立てた鐵道連絡船で嚴島の波止場に着いたのは、櫻はとうに散つて、風は暖に、山

嚴島神社の大鳥居

河の姿が何となく長閑な頃でした。

私は暖い春の一日を嚴島の此處彼處と遊び歩きました、波止場から立並んだ兩側の店に土産物や細工物が澤山並べてあるのを一一見て歩きました。

紅葉谷は樹木鬱蒼として泉石の趣に富んだ、幽邃の境でした。そこの旅館



嚴島神社とその回廊

に私は泊つてゐたのです。

歌の濱の松原には鹿が澤山遊んでゐました。奈良の鹿ほどは人に馴れてゐませんが、それでも食物を求めて寄つて來ます。

彼の海中に聳えた大鳥居を眺めるには此の附近がちやうど宜しいのです。

又大願寺には多數の鳩がゐて、豆をまくと、恐ろし

い羽音を立てて集つて來ます、豆皿を持つてゐる私の手から肩から頭まで一杯にとまります。旅の身にはこんな事が樂しみなのです。

遊び暮らして嚴島神社に來た時には、日ははや後に聳える彌山（みせん）の陰に隱れて、漸く暗くならうとする頃でした。海へ作り出されて、幾重にも折れ曲つた長い廊下は全く水の上にあるのです。此の廊下は百八間あるといひますが、塵も無い板張りの廣い廊下を靴音輕く歩き廻る心地は、何となく愉快なものでした。私は奥深く造られた暗い本殿の邊にたゝずんで、遠く海上に突き出てゐる廊下の彼方に、遙かに暮れ行く海の面に眺め入つてゐました。廊下の中央には一段高い四角な舞臺があります。其の舞臺の先の方に大きな燈籠が立つてゐまして、其の根元臺石の邊に二人の巫女がゐました。

薄いもやのかかつた夕方のことでしたが、白い衣服に緋の袴をつけた十二三位の少女が二人、一人は高く立ち、一人は低く跪いてゐる姿がはつきりと私の目に映りました。一日の神の勤を終へて、暫くの暇を此の廻廊へ出て、清らかな影を水に映してゐた少女は、互に何を語つてゐたか知りませんが、柱も勾欄もすべて丹塗の、極めて優美な建築の此の社頭には、巫姿の少女程似合はしいものはないと思ひました。それほど嚴島の御宮はやさしい建築なのです。

*嚴島の最も高い山

*文學博士
史學者
東北帝國大學教授
（大類伸）

*メーテルリンクの
劇中の人物

四　太陽と風

廣い野原の眞中で、太陽と風とが何か言ひ爭つてゐる。

太陽になる役者(女の子)は赤い帽子をかぶり、金紙で飾りを附け、額の眞上に當るところには、「青い鳥」の*チルチルの帽子のそれのやうに、懷中電燈を仕掛ける。さうして球へ赤い紙を貼つておく。風になる役者(男の子)は大きな紙袋を成るべく大きくふくらませて擔いでゐる。

太陽　なあに、僕のはうが君より強いよ。

風　うゝん、そんなことがあるもんか。僕のはうが強いよ

太　うゝん、僕のはうが強いよ。

風　ぢや、證據を見せたまへ。

太　見せるとも。

風　見せるッて生意氣なことをいひたまへ。君はまだ僕の力の強いことを知らないと見えるねえ。君、僕がうんと力を入れて吹き出すと、どんな大きな木だつて、根元から引ッこぬけッちまつて、ぶッたふれてしまふよ。家だつて、何だつて、吹きたふしてしまふんだ。

太　さうかも知れないねえ。けれども、僕はそれよりもえらいことをして見せるよ。

風　（馬鹿にしたやうな口吻で）へいそりやえらいねえ。見せて貰ひたいねえ。

太　（一方を見て）御覽よ、ほら、あそこへ人間が一人來たらう。

大きな外套を着て、とッ〳〵とッ〳〵と、こつちへ歩いて來るだらう。

風　あゝ。

太　ねえ、あの人間で以て、君と僕との力をためして見よう、どちらが強いか。

風　そりやわけないや。あんな者なら、僕ァたつた一吹きで吹き倒してしまはァ。

太　ただ吹き倒すんぢやいけないよ。

風　ぢや、どうするの。

太　君の力であの外套を脱がせることが出來るかい。

風　出來るとも。ありやきつと、お父さんのでも借りて著

て來たんだらう、大變に大き過ぎてだぶ〳〵してる。あんなのなら、だしぬけに強く吹きや、すぐ吹き飛んぢまふよ。

太　ぢやァ、やつて見たまへ。

このうちに旅人が出て來る。

風　よオし、……さァ、吹くよ。……そら、ブウウウウウ。

旅人は吹飛ばされさうになつて、ひよろひよろして、外套が脱げさうになるのを兩手で抑へて、はづれかかる釦を幾度も幾度も直し〳〵する

旅人　こりやたまらない。ひどい風だ。どうしてこんなに俄かに吹き出して來たんだらう。おう寒い〳〵。こりやた

まらない。歩かりやしない。あゝ〳〵、吹き飛ばされさうだ。おゝ、寒い〳〵。

風　ブウウウウ。

旅人（又外套を取られさうになつて）どつこい、どつこい、この外套を取られちや大變だ。これがなくなつちやこごえて死んぢまふから。

風　ブウウウウ。

旅人　こりや立つてゐちやいけない。突伏しッちまはう。

人間は地上へ突伏してしまふ。

太　（風に向つて）君、外套はちつとも脱がせられないぢやないの。

風　だつて、君、突伏してゐるもの仕方がないや。起きさへすりや脱がせるけれど。

太　僕は突伏してゐたつて、脱がせて見せるよ。

風　どうして。

太　ま、見てゐて見たまへ。

（太陽は帽子に仕掛けある電燈を一寸押すと、赤い光線が人間のはうを照らす。強い日光があたつた積り）

旅人　おゝ、風がやつと鎭まつたと思つたら、太陽がかんかん照り出して來た。あゝ、ありがたいありがたい。おゝ、大變に暖かくなつて來た。（起きあがつて）どれ急いで出掛けませう。（歩き出して）歩くと、暑いくらゐだ。（一廻り歩いて）あ

あ、ありがたいありがたい。もうこんな外套なんか要りやしない。（脱いで）あゝ、これで體が輕くなつた。どれ、急いで行きませう。

旅人はすた〳〵と入つてしまふ。

太　どうだい、君、僕が勝つたらう。

風　（不平さうに默つてゐる）

太　ねえ、君、何でも力づくばかりぢやいけないよ。一寸の蟲だつて五分の精神はあるからねえ。寒がつてゐる者を溫めるやうにしてやりや、自然と自分で脱ぐけれど、力づくで無理やりに脱がせようとすりや、却つて死身になつて抵抗します。解つたの君。

風　ブウウウウウ、は。

不平さうに頰ッぺたをふくらして入る。太陽はそれを尻目に掛けて靜かに莞爾と笑ふ。

（坪内逍遙*）

*名は雄藏　文學博士　早稲田大學名譽教授

五　忠實

或日、船長が船の中に働いてゐる人達を集めました。

「さあ、皆さん、こゝにお金の入つた袋があります。あなた方の中で、一番よくお船の爲に働いて下さる方に、この袋を上げます。」とさう申しました。

火夫が眞先に船長の前へ進み出ました。

「船長さん、私位このお船の中で骨の折れる仕事をしてゐるもの

はありません。私は百度以上もある熱い竈の前で、眞黑になつて毎日働いてゐます。私が石炭を焚かなければ、このお船の機關が直に止つてしまひます。私はお船の爲に一番よく働いてゐます。どうぞ、そのお金の袋は私に戴かせて下さい。」と申しました。

運轉手が船長の前へ出ました。

「船長さん、船長さん、私は晝でも夜でも高い船橋の上に立ちつづけに立つて働いてゐます。あなた方がお休みになる時でも、私は眠らずにお船の舵を動かしてゐます。私がゐなければ、このお船は何處へ行くか知れません。暴風雨に逢つても方角がわかりません。港へ着きたくも着くことが出來ません。私はお船の爲に一番よく働いてゐます。どうぞ、そのお金の袋は私に戴かせて下さい。」と申しました。

炊事掛りの料理人が出て來ました。

「船長さん、船長さん、私はあなた方の爲に三度々々なくてならないものを拵へてをります。私は朝から晩まで庖丁を持つて、大勢の人を養ふ爲に休まず働いてゐます。パンを燒くのも私です、お魚を料理するのも私です。私が一日ゐなければ、このお船の中にゐるものは皆饑餓ゑて死んでしまひます。私はお船の爲に一番よく働いてゐます。どうぞ、そのお金の袋は私に戴かせて下さい。」と申しました。

事務員が出て來ました。

「船長さん、船長さん、火夫や運轉手や料理人があんな事を申しますけれども、一體このお船は何の爲にあるのですか。石炭を焚

く人があつても、舵を取る人があつても、食物を拵へる人があつても、唯そればかりでは仕方がありません。荷物を積まなければ何にもなりません。お客樣を乘せなければ何にもなりません。港へ着く度に澤山な荷物の揚げ卸しから、お客樣の世話をして、汗を流して働くのは私です。私はお船の爲に一番よく働いてゐます。どうぞ、そのお金の袋は私に戴かせて下さい。」と申しました。

今度は誰が出て來るかと思つて船長が待つてをりますと、一番終に進み出たのは年をとつた水夫でした。

「水夫よ、お前も何か言ふことがあるか。」と船長がたづねました。

さうすると、その年をとつた水夫は船長の前に丁寧に頭を下げまして、

「船長さん、船長さん、私は皆さんのやうに強い力もなく、勝れた智慧もなく、これぞと申す才能もありません。唯正直一方にしてお船の爲に働かうと思ふ無學な水夫でございます。もうずつと以前に、私は自分の過失から、このお船の帆柱に在る高い梯子を踏みはづし、眞逆樣に海へ落ちました。固より水夫のことですから水泳は心得てをりますが、何分にも大きな海の中で、私は潮の爲に押流されてしまひました。幾ら私が焦慮つても、泳いでも、かなひません。私は叫んで救を求めましたが、見る〳〵お船は遠くなつてしまひました。その時、私はもう助からないものと思ひました。若し此のお船を止めて下さる方もなく、私の方へ助けの綱を投げて下さる方もなかつたら、疾くの昔に私は鱶の餌食にでもなつてゐたかも知れません。それを思ふと私

は今でもぞつとします。このお船は私の恩人です。私はその御恩返しに、一生此のお船で御奉公するつもりでございます。」と申しました。船長は皆の言ふことを聞いて、

「成程、火夫がゐなければ機關は直に止つてしまふし、運轉手がゐなければ方角を定めることが出來ないし、料理人がゐなければ皆餓ゑて死んでしまふし、事務員がゐなければ荷物やお客さまを扱ふものがない。誰が一人缺けてもこのお船は動きません。しかし、皆さんは何時までも此のお船に留り、飽きずに働いてゐて下さるでせうか。早く陸へ上つて、もつと他の事をしたいと思ふやうな働き手よりも、私はこのお船で一生御奉公したいといふ水夫を好きます。お船の爲に一番忠實なものはこの水夫です。」さう言ひまして、船長はその金の袋を正直で年をとつた水夫にくれました。

六　義勇（一）

（島崎藤村）*

出帆の汽笛が、靜かな小さい港の空氣を、つんざいてけたたましく鳴つた。それと同時に、小學生達は、「わあーつ」と歡呼の聲をあげた。

船は動き出した。澄み切つた潮を、搔き擾す推進機（スクリウ）がシヤンパンの沸騰のやうな純白な泡を後から後から湧き立たせた。ガタンゴトンと舊式の機關の音が、高くなつた。

小學生達を見送つてゐる、遙かな岸の群衆は、船が動き出す

*名は春樹　詩人小說家

のを見ると、一齊に聲を立てた。父兄や母や姉などが、銘銘その小さき者等の短き航海を祝福した聲であつた。この聲に應ずるやうに、小學生達はみんな一齊に左舷の方へ集つた。そして「わーつ」と聲を立てた。

その刹那であつた。丁度此の晴れわたつた空に、雷鳴を聞くと同じやうな何人もが思ひがけなかつた、殆ど夢想だにもしなかつた危險が湧き起つた。小學生達が、左舷へ集ると共に、船はズルリと引きずられたやうに、烈しく左舷へ傾斜したのである。

「わあーつ」と、叫聲が甲板にも、船室にも起つた。

恐らく上甲板に居た船長が、一番先きにさうした叫聲を

擧げたかも知れない。彼は何人よりもかうした傾斜の恐ろしさと、それに對する自分の手落とを知つて居た。その手落は、彼に取つては習慣になつて居る手落だつた。彼は何時の間にか、定員以上に載せると云ふ手落を何とも思はなくなつて居た。旅客が、割合に多い爲、彼は何時の間にか、定員以上に載せることを、餘儀なくされて居た。が、定員以上に五人乘せ十人乘せ、それが何の故障も起さないと、何時の間にか定員の倍數以上に乘せる事にすら、馴れてしまつて居た。

過去七年間繰り返された平穩な航海の記憶と、池か、大きくとも湖水位にしか思はれない内海に對する彼自身の馴

れ親しみの感情とが、何時の間にか彼の心の最後の警戒を解かしめて居た。もう彼の頭には定員などと云ふ觀念は少しも存在して居なかつた。今度の航海に於ては百名に近い小學生徒は、悉く定員以上の乘客であつた。が、目前の烈しい船體の傾斜を見ると、彼は愕然と、夢から叩き起されたやうに蒼くなつた。彼の馴れ切つた手落に對する悔恨が、急に彼の心を喰ひ始めたのである。

其の上、彼は積み込んで居た大理石を此の港で陸揚した後には、何等の積荷も殘つて居ないことに氣がついた。船脚が淺いと云ふことが、彼に取つて他の一つの大なる恐怖であつた。

船長は懸命になつて、傾斜を返さうとあせつた。が、それと同時に恐怖に驅られた小學生達は悲鳴を擧げながら、右舷の方へ馳け上つた。

底がからつぽで、頭だけ重い船が、一度左舷の方へ傾いたと思ふと、更に、右舷へ搖り返した時には、其處に傷ましい悲劇が、始まりかけて居た。

足場を失つた小學生が五六人、ころころと機みを喰つて、欄干にも支へられずに海中へ滑り落ちたのである。

船室にも甲板にも、烈しい混亂が起つた。船室の人々は芋を洗ふやうに、左右に搖り動かされた。彼等は銘々甲板へ出ようとしてあせつた。彼等は、口々に悲鳴を擧げ、叫聲

を擧げた。

「子供を救つてくれ。子供を救つてくれ。」といふ老校長の、皺がれた聲が、いろ〳〵な悲鳴の中を縫うて聞えた。さすがに、上等兵曹の向井喜作は、一番心の落着を失つて居なかつた。

「あわてるといかぬぞ。しつかり摑まつて居ろ。」と、慄へて居る妻と母とを勵ました。妻と母とは纜を捲く太い柱に、必死にしがみ付いて居たのである。

その時に、兵曹の眼に甲板から轉落した小學生達の、もがき苦しんでゐる姿が映つた。波の少しも立つて居ない海の中では、彼等のもがいて居る姿が、まざ〳〵と見えた。船は急にストップしたものの、惰力で彼等を、數間の後方に殘して居た。彼等は小さい手をめちやめちやに動かして海面を叩いて居た。が、その勢もだん〳〵衰へて、彼等の衣類に、海水が浸むと共に、彼等の頭が、しば〳〵海水を潛つた。

船が、もりを喰つた鯨のやうに、よろけながら、海面を滑つて居る間、船の上は混亂を極めて居た。誰もが、傾斜して居る甲板から、振り落されまいとして、身近の何物かに、懸命にかぢり付いて居る。船員は船員で、船を正當な位置に、引き戻さうとして、血眼になつて居る。海中に苦しんで溺れかかつて居る者の爲にはただ一本の指さへ救助のために、動かされては居ないのであつた。

七　義　勇　(二)

自分の責任感に苦しめられながら、しかも身を挺して、救助に赴くだけの力も勇氣もない老校長は、先刻から悲鳴に似た叫聲を擧げて居る。艀は、もうとくに、海岸の方へ去つてしまつて、再び漕ぎ付ける迄には、可なり時間が經たねばならなかつた。

兵曹の心の中に、軍人に特有なヒロイックな心持が、湧いて居た。もう叫聲もろくには出せなくなつたらしい、小學生達を見て居ると、彼はどうにもじつとして居る事が出來なかつた。彼は、心の中で妻と母とを保護せねばならぬ自

分の責任を考へた。が、彼は船の傾斜が、回復せらるることを信じて居り、それと同時に、彼等が安全の位置に置かれることを信じて居た。妻や母の保護を口實に、難に赴かないのは、自分が怯懦である爲だとさへ思つてゐた。

その時に、船から一番遠い所でもがいて居た紺飛白の着物を着た子供が、ピチピチ動かして居た手足が萎え切つたと見え、最後の努力として、一しきり海面で跪いたかと思ふと、その儘沈んでしまひさうに見えた。兵曹はもう何等考慮の餘裕を持たなくなつた。彼は妻と母とを顧みて、

「放すんぢやないぞ。俺はあの子供を助けに行くから、しつかり摑まつて居るんだぞ。何も恐いことはない。」といひ

つゝ、穿いて居た靴を脱ぎすてて傾いた甲板をころがるやうに、舷側に近づくと、彼は其處から、飛び込まうとして、ふと妻と母との方を振反つた。彼は、その時母の顔にも妻の顔にも、絶望と恐怖が浮かんでゐるのに氣が付いた。が、其の時、機みの付いた彼の身體は、欄干を跳り越えて居たのである。

子達が轉落してから、兵曹が救助に赴くまで、本當は一分も經つて居なかつた。が、泳ぎの出來ないらしい二三人は、もう疲れ切つてしまつて居て、ガブ〳〵と鹽水を、續け樣に飲んでゐた。

兵曹は二人の子供の肩揚の所を掴んだ。水泳の得意な兵曹は、二人の子供を支へながら、自分自身を、容易に海面に

支へることが出來た。

が、彼がさうして、子供達を漸く救ひ得た時であつた。彼の豫想とは反對に、船の傾斜が、愈甚だしくなつたかと思ふと、甲板にかぢり付いて居た人々の手が、何の苦もなく振りもがれて、甲板から海中へと、幾人もの人々が、小石か何かのやうに轉落し始めたのである。

船が、その左舷を可なり凄じい音を立てながら、海水に浸した時、直立した船尾の甲板を、二つの人間が、一塊りになつて、ころ〳〵と品物のやうに、滑り落ちるのが、兵曹の眼に映つた。そして、眞紅な長襦袢の裾が、あらはに舷の欄干にひつかかつたかと思ふと、直スルリと外れるのを見た。

兵曹は、狂氣のやうになつた。彼の周圍に溺れかけて居る幾人も幾人もの人間が、もう彼の眼中に存在しなかつた。

否彼は自分が支へて居た二人の子供をさへ、突き放した。彼は懸命になつて、妻と母との方へと急いだ。が、彼が右の手を出せば右の手に、左の手を出せば左の手に、小學生達の手足が搦みついた。何の手も何の足も、小さい人間の手足とは思はれないほどの必死な力を持つて居た。横倒しになつて水に浸つて居る船尾までわづか十間に足らぬ距離を泳ぐのに、彼は四五分もかゝつた。

彼が漸く、妻と母とが轉落した場所まで、泳ぎ着いた時には、靜かな海面には、彼女等がもがいた跡さへ殘つて居なかつた。彼は、必死になつて、潜ぐつた。息のつづく限り、力の及ぶ限り潜ぐつた。が、海は深かつた。何處まで行つても、底らしいけはひさへしなかつた。

彼が、へた〳〵になつて、必死の捜索を中止した時、彼の目前に溺れかけて居る多くの小學生達を見付けた。彼が、夢中になつて突き放した子供達の命までが、氣遣はれた。妻と母との命を救ひ得なかつた補ひに、せめて他人の命を救はうと思つた。それに、めちやめちやに動き廻りでもしなければ、彼の恐ろしい絶望は、まぎらされさうにもなかつた。

彼は、手當り次第に小學生達を、救ひ始めた。一度に二人宛兩手に支へながら、漕ぎ付けて來た救助船の中へ救ひ上

げた。

それを、幾度繰り返したかわからなかつた。彼は、根限りへたへたになるまで、活動した。

もう救ひ上げる子供が、一人もなくなつた時、彼は再び妻と母との沈んだ海面を見詰めた。其處には、彼等の身に付けて居た櫛一つ下駄一つさへ浮いて居なかつた。

上等兵曹の必死の活動にも拘はらず、乘客の溺死者は十五名に上つた。その中には、彼の最愛の母と妻とが數へられて居た。

（菊池寛）*

八　東宮殿下の御著英

*創作家

大正十年五月九日午前八時、御召艦は英二海里を隔つる英國第一の軍港ポーツマスに向ひ、五十分の後、御召艦は南鐵道棧橋に横附になつた。英國御入國は公式であつた爲に、皇太子殿下・閑院宮殿下には陸軍の御正裝を召され、供奉員は正裝又は大禮服を著用した。

皇太子殿下

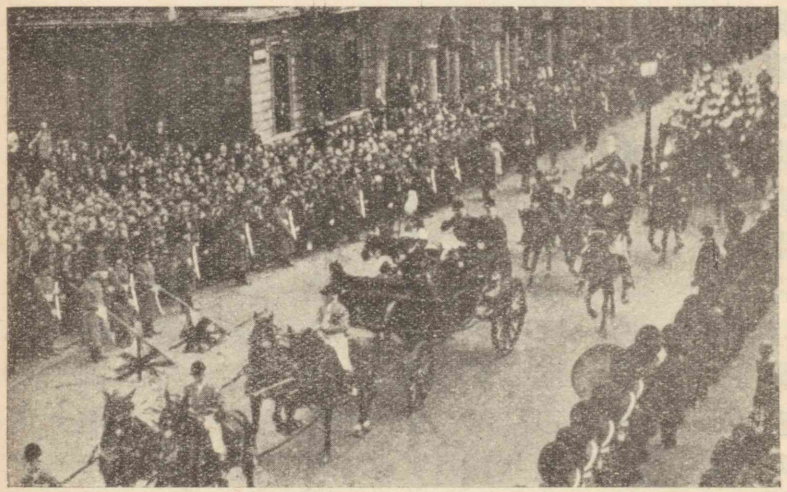
午前十時四十五分には、棧橋より宮廷列車にお乘りになつてロンドンに向はせられた。驛を御發車になると、市内沿道の民衆は、鐵道沿線では勿論、線路に面する家々の窓か

らも、殿下に對して極めて熱心に歡呼した。軍港地であるだけに、勞働者が多い。彼等の素樸な自然の歡迎には、さぞかし殿下も御滿足に思召された事であらうと拜察した。

五月の英國といへば、日本で四月の季節に相當する。メー、ツリーと俗に呼ばれてゐるホーソンの樹には、紅又は純白の花が爛漫と咲き匂ひ、いはゆるグリーン(芝生)は春の光に萠え出で、草原の中をゆるやかに流れる水のぬるむ季節である。平和な綠野には、牛が放牧されてゐる。二箇月餘に亙る長い御航海の後に、かゝる長閑な風景を御覽になつた殿下は、定めし快く思召したであらう。後に殿下がしばしば英國の風景を御賞美遊ばされるのを承つて、私共は其の推察の誤らなかつた事を確め得たのである。

零時四十分御召列車はロンドン市のヴィクトリア停車場に著いた。驛には英國皇帝陛下が躬ら第二皇子のヨーク親王、父君のコンノート親王を御同伴、外務大臣・宮內大臣等を隨へて御出迎になり、東宮殿下と簡單な御挨拶を御交換になつた。

かくて英國皇帝陛下は、再三上席を御辭退遊ばす東宮殿下を、四人乘の御馬車の最上位卽ち御自分の右側に御請じになり、東宮殿下の御前には、ポーツマスまで御出迎の英國皇太子殿下、其の右に珍田供奉長が著席したのであつた。又閑院宮殿下には、第二の御馬車にヨーク親王と御同乘、他



皇太子殿下御著英の圖

の供奉員は、接伴員と相交つて鹵簿に加はつた。

沿道の兩側には兵隊を堵列せしめ、「君が代」の奏樂は、停車場から王宮に到るまで絶えなかつた。堵列兵の後には、拜觀者が黑山を築いて御通路を埋めた。彼等は最もよく秩序を守つて手を振り帽をあげ、又中には日本の國旗を手にして最も熱心に日

本語で「萬歳」を唱へ、又は英國の「フレー」を絶叫した。

中にもバッキンガム王宮前に奉迎の最好の一角に密集した在留日本人は、何れも歡喜に輝く面持で熱心に御迎へ申上げた。それは固より東宮殿下の御安著に對する歡喜の輝であることは言を俟たぬ所ではあるが、他に又英國官民が擧つてかくまで我々の戴く皇儲――内家の殿下を歡迎してくれるのかといふ感激の輝が交つてゐない筈はなかつた。聞けば此の奉迎の好位置は、其の日に集つたロンドン市民が、自發的に讓り合つて日本人の爲に特に與へてくれたのであつたといふ。

一時五分鹵簿は肅々とバッキンガム王宮に著し、御車寄

前の廣場で殿下は儀仗隊をお閲兵になり、それより「弓の間（ボールーム）」といふのに御入りになつた。此の宮は謁見に用ゐる大廣間で、紅の絨毯を布きつめてあつた。窓の外には美しい綠の芝生が展開されてゐる。東宮殿下には、幾多の高官の侍立する裡において、皇后陛下・內親王殿下等と御會見になり、我が天皇陛下の御鄭重な御傳言を兩陛下に御傳へ遊ばした上、殿下より兩陛下に供奉員全部を御紹介になつた。

午餐後、皇帝陛下から我が東宮殿下に、英國陸軍大將の御資格とバース頸飾章とを御贈進になつた。これは國際間に於て、しば〳〵例のある事で、英國が日本に對する特別の好意の表象である。

*宮內書記官伯爵二荒芳德・外務書記官澤田節藏合著

英國の御滯在は、初の三日間が皇室の賓客、後の五日間が政府の賓客であらせられる事に定まつてゐた。それ故殿下には、閑院宮御同伴、珍田供奉長・山本御用掛等を隨へさせられて、バッキンガム王宮に御宿泊遊ばされ、他の供奉員は英國政府が用意した或名流の家に宿泊する事となつた。

バッキンガム王宮の御滯留は、東宮殿下におかせられては最も深い御印象を得させられた事と思ふ。兩陛下は常に殿下に對して何彼と御心配あらせられ、恰も御自分の御子樣でもあるかのやうに御世話を遊ばした事は、御側で拜する我々の感激に堪へなかつた所である。

（*皇太子殿下御外遊記）

九　星日記

×月×日　晴

今夜も星が綺麗だ。とても數へつくされないなと思ふ。天の川も出てゐる。お星さまの夕涼みだ。

×月×日　雨

空は、夕方から雨模様で、變にむし暑い。窓を開けても、風らしい風も入つて來ない。そのうちにたうとう降り出した。空は眞暗だ、星は皆何處に行つたのだらう。何處で雨やどりをしてゐるのだらう。

×月×日　雨

空の星のなかには、小熊・大熊・雙子・蛇遣ひ・鷲・印度人などと云ふ名前の付いたのがあるさうだ。また其の外にも麒麟だの、白鳥だの、狼だの、それからこつぶだの、天秤だの云ふのもあるさうだ。

空を幾つかに區分して、その一つ一つの形をそんなものに譬へて云ふのだと、今日讀んだ本に書いてあつた。「小熊」の中にも、大小いろ〳〵の星がある。「印度人」の中にもさうだ。星の數は、今日までにわかつてゐるだけで五十萬近くあると云ふことだ。

まるであの廣い空の中で、動物園や、曲藝や、手品などの餘興が始まつてゐるやうだ。

×月×日　晴

本を讀んでゐる。いろ〳〵星のことがわかるので面白い。お月さまのところも面白い。

お月さまを望遠鏡で見ると、お月さまのなかにある山や、昔の噴火口の跡や、溪間や、平原などが手に取るやうに解るさうだ。お月様の中で、一番高い山は四萬二千呎以上もあるさうだ。富士山や新高山なども比べものにはならない。印度にあるエヴエレスト山と云ふのが地球では最も高い

山ださうだが、それでも二萬九千呎で、とてもお話にならない。

月には、水も空氣もないので、無論生きてゐるものなどは居ないさうだ。お月様に觸ると、何だか冷たい、ぞつとするやうな寒さを感じさうだ。

曉の明星、宵の明星などと云はれてゐる、あの夕方未だ日の暮れ切らない中に、西の空に拭ひ立てのやうな美しい光を放つてゐる星は「金星」といふ星ださうだ。

×月×日　晴

みんなから離れて、たつた一人ぽつちで光つてゐる星が

ある。仲間はづれしたかはいさうな尼さんのやうだ。星はきつとみな尼さんだらうと思ふ。お星様だつてきつと人間のやうに、あの高い空で仲間はづれをしたり、惡口をきき合つたりしてゐるに違ひない。あんな遠い處で、獨りぼつちで光つてゐるのはほんとに寂しさうだ。みんなに虐められて除けものにされて泣いてゐるのかも知れない。

かはいさうな星。

×月×日　晴

流星を見た。本屋へ行つた歸りがけに、ひとりであの寂しい學校の横の塀に沿つて歩いて來ると、だしぬけに何か

ぴかりと光つた。向うを見ると、眞正面の何處かのお邸の大きい樹の茂みの上を、なゝめに星のやうなものが落ちて行つた。

矢よりも迅かつた。

何處まで落ちて行くのだらう、何處まで……。

（百田宗治）*

一〇　笛

*詩人

昔、京都に博雅（はくが）といふ笛吹きの名人がゐました。天子様に仕へて、三位の位をいただいてゐましたので、人よんで博雅の三位と言ひました。

或晩、この博雅の家へ、覆面をした賊が四五人はいりました。その物音にふと目をさました博雅は急いで蒲團から身を起すと、そつと音のしないやうに板敷の板をあげて床下へもぐり込みました。家族の者は、其の晩親戚へ泊りに行つて丁度留守でした。賊は、誰も人のゐないのをいいことにして、あつちこつちを手あたり次第に明け散らして、大事なものをみんな持ち出して行つてしまひました。

博雅は、賊が行つてしまつた頃を見計らつて、床下から這ひ出しました。見ると、自分の着物は勿論、家族の着物まで、一枚殘らず持つて行かれてゐました。大事な卷物もありません、しまつて置いたお金もありません。

「はゝゝ。よくこれだけ綺麗に持つて行けたものだ。」

悲しむかと思ひの外、博雅はかう言つて大口を開けて笑ひ出しました。

「なあに、構はない。なまじつか、物を持つてゐるから惡いのだ。持つてさへゐなければ、取らうと言つたつて取られるものではない。人間は何も持つてゐないのがいゝのだ。—どれ明け方までもう一眠りしようか。」

かう言つて、博雅は方々を見て廻つた後、また自分の部屋へ歸つて來て寢床に這入らうとしました。そして何氣なく枕もとの厨子棚を見ると、そこに不斷から非常に大事にしてゐた竹の細笛が殘つてゐました。博雅はそれを見ると、飛びあがつて喜びながら、

「有難い、有難い。この笛も一緒に持つて行かれたものとばかり思つてゐたのに、さすがの賊もこれには氣がつかなかつたもの

と見える。これさへあれば外のものはみんな無くなつても惜しくない。」

かう言つて、その細笛を手に取りあげました。さうすると急に口に當てて吹いて見たくなりました。そこで博雅は立ち上つて、庭に向つた雨戸を明け放すと、靜かに笛を吹きはじめました。外は青い月夜でした。

博雅は自分の吹く笛の音に聞き惚れて、凡そ二三十分も夢中になつて吹いてゐましたらうか、うしろで人のゐる氣勢がしたので、急に笛をやめて振り返つて見ました。見ると、そこに見しらぬ男が一人、疊に兩手を突いて控へてゐました。博雅はぎよつとして居ずまひを正しました。その樣子に、相手の見知らぬ男は、心持うしろへ膝をゐずらしながら、恭しく博雅に向つて一禮しました。

そして、

「さぞお驚きになつたことと存じます。私は先程こちらを荒らしてまゐつた賊でございます。」

と言ひました。「賊……。」と博雅は思はず驚きの聲をあげました。

「はい賊でございます。その賊が實はかうしてお詫びに上つたのでございます。」

かう言つて、その賊だと言ふ男は始めて顏をあげました。見ると、顏中目と鼻と口だけを殘して、あとは一面髭の生えた、見るから物凄い男でした。

「かう申しただけではお分りになりますまいが、實は先程どなたもいらつしやらないのを幸、欲しいもののありたけを、みんな手下四人と一緒に持ち出して行きました。そして車に載せて自

分の住處へ持つてまゐらうと、一町ほども引き出した頃でございましたらうか、ふいにうしろの方で何とも言へない好い笛の音が聞えました。はじめは何の氣もなく聞いてをりましたが、そのうちに、だん〳〵その笛の音に引きつけられて、しまひには、一歩も前へ進めなくなりました。それで、ぢいつと耳を澄まして聞き入つてゐる中に、今までして來た自分の惡い行が、あなたのお吹きになるその清い笛の音に對して羞しくなつてまゐりました。今まで眠つてゐた良心が、先生の笛の音に呼び起されたのでございます。さう氣がつくと、私は矢も楯もたまらなくなりました。子分の止めるのも聽かずに、夢中になつて先生のお宅の前まで駈け戻りました。そして案内も乞はずに、かうしてこゝまで這入つて來てしまひました。

先生、どうか私の今までして來た罪をお赦し下さい。そして改めてお弟子の一人にお加へになつて、笛の一手でもお教へ下さい。お願ひでございます。」

かう言つて、其の賊と名乘る男は、眞心を顏に現はして賴みました。博雅は、その心根に感じました。そこで早速罪を赦して弟子の一人にしてやりました。ところが覺えの早いことと言つたら、後から弟子になつたくせに、外の弟子達を追ひ拔いて、瞬くうちに上達をして行きました。そして四五年うちには博雅の數ある門弟の中でも、五本の指にをられるくらゐの上手になりました。七年目には一ばん弟子になりました。十年立つうちには、もうお師匠さんの博雅も、敎へる曲譜がなくなつてしまつた程でした。用光といふのがこの人の名でした。

或年、用光は用があつて故郷の土佐へ歸りました。その歸り道に、船で淡路島の沖へさしかゝつた時、海賊船に襲はれました。用光は、今殺されようとする時になつて、海賊の頭を呼んで、

「私は實は笛吹きだが、一生の名殘りに笛を一曲吹きをはるまで、殺すのを待つてくれまいか。」

と賴みました。「よろしい。」と頭は言つて許してくれました。そこで用光は、心しづかに、自分の好きな短い曲を吹きはじめました。すると不思議なことに、今までぎらぎら光る太刀を引き拔いて控へてゐた海賊の頭が、その刀を鞘に收めると同時に、そこへ踞んで首を垂れて聞き惚れてしまひました。そして用光が一曲吹きをはるのを待つて、

「先生、あなた程の名人を殺してしまふのは勿體ない。どうぞこの儘船に乘つてゐて下さい。」

と言つて、そのまゝ用光を難波の津まで送つて來てくれました。あとで用光はこのことを先生の博雅に話したところが、先生は、

「さうか、お前の腕前も名人の域に達したわい。」

と言つて、大層褒めて下さいました。

後に、用光は、師匠の博雅に代つて朝廷に仕へて、永くその名を後の代にまで殘しました。

（小島政二郎）*

*小說家童話作者

一一　白い曙

ああ、白い曙、
白みくる谷間の

春のあけぼの。
巒二つ三つ
靄より見え、
さやかに
鳴きとよむ
雉子のこゑごゑ。

山ざくら
誰が折捨てし、
水に落ちて、
流れは

これを洗へり。
青苔にかたよれる
淡紅の
花片。

やはらかき
草の蓐に
「曙」は起き上りて、
稚兒(うなゐご)のごとく
目をこすり、
さみどりの

詩人

匂の染みて、
すずしく
身震ふ。

一二　返らぬ日　(一)

(三木羅風)

三千代は同級の或女の子の家から貰つて來たとかいふ一羽のカナリヤを、――澤山に孵化つた子鳥の一羽を貰つて來て――籠に入れて飼つてゐた。

それを三千代は一人で大事にして、わたしが貸せと言つても貸さなかつた。柱にかけてあるのを下して見せろといふだけの事をでも、鳥が怖れるから厭だと言つて、聞かなかつた。祖母にねだつても、一つゐればいゝのだと言つて、わたしのにするのを買つてくれない。わたしは三千代の小鳥が惡くなつた。

それはどういふ事からだつたか忘れたが、或日わたしは何かの事で三千代と言ひ爭つて、さういふなら、お前さんは家の子ではないのだから、もう行つてしまふがいゝといつた事があつた。三千代はつんとして、さつさと祖母のところへ行つて、そこでわざとしく〳〵泣くのだつた。さうすれば、祖母はどうしたのか、どうして泣くのかと勞り聞く。三千代は默つて泣き〳〵して、それでわたしに當て附けを

するのが癖なのだ。

「いゝから、こつちへお出でよ、附いておいでよ。」譯をいはずに泣いては解らぬに。」と、祖母は三千代ばかりがいゝものやうに宵めつゝ、何かの用事で倉の方へ出かけて行くのに、三千代は泣き〳〵くつ附いて、――三千代一人の所有する祖母のやうに、わたしの方を見向きもせずにくつ附いて行くのだ。わたしは一間に唯一人となつて、障子の紙に指で穴を開けたりして、忌々しく淋しい目を見てゐるのに、祖母は三千代ばかりを庇つて、わたしの事を忘れてゐるものやうに、いつまで待つても歸つて來ない。わたしは癇癪の餘りに、三千代のいつも貸してくれないカナリヤを、默つて取り下していぢくつてやる。しまひには手を籠に入れてばた〳〵と愕き騷ぐ鳥を柔かに摑んで出して、口を開けさせて覗いて見たりする。さうして、それを持つたまゝ、のそのそと倉の方へ行くのだつた、――どういふ積りだつたものか、今考へてはわからないけれど。行つて見ると、祖母たちは倉の二階に上つて何かしてゐるのであつた。階下は入口の戸だけが開けてあるのみだつたので、中は暗くなつてゐる。わたしはかうして、三千代の見ない間に、三千代の鳥をこんなに掌に持つたりして、二人のいつまでも出て來ない戸口にうろついてゐるといふことが、三千代に對していゝ氣味なやうに思はれた。それだから、わたしはその

儘窃に中へ這入つて、狐かなぞが隱れてゐるやうに、階子段の下の暗い所に、祖母達が來る迄隱れてゐた。

けれども、二人は容易に下りさうにもない。わたし一人を放つといて、上で何をしてゐるのか。――わたしは、人がさうさせてゐる事のやうに――だれかが出てもよいと言ひに來てくれる迄は出る事も出來ないもののやうに、じつと其の暗い處に埋れて立ち盡くしてゐた。けれども、誰がさう言つて來てくれよう。――勝手なわたしはやがて其が一人で物悲しくなつて來た。

と、小憎らしい三千代がとこ〳〵と下りて來る。祖母も續いておりて來る。さうして二人はわたしのゐるのには

氣付かないで話をしながら、戸を閉めて出て行つてしまふ。祖母は切布の這入つてゐる大きな疊紙を抱へてゐた。戸が閉まると共に、中には暗がりと私とだけが殘された。封じられた暗さの中に戸締（カト）栓（シン）を開ける鍵穴が、小さく四角に明るく見えてゐるだけである。それが遠くにあるもののやうに淋しく隔つて見えるのだつた。

出ようと思へば、内から栓を上れば戸は開くのだけれども、かうした儘出ずにゐて、夜になつても出ずにゐて、祖母たちがどんなに私を探し廻るだらうかを試みて見たい。さうして、いつまでも私が此處にゐるといふ事を見出されないとして、だから夜になつても出られずに、一人で封じ入れ

られてゐるのだといふ事にしたい。—わたしは自分でさういふ事にきめて、わざと色んな物悲しい事ばかりを考へた、—わく〳〵と小さい動悸を打つ、柔かい小鳥を、やつぱり其のまま手の中に持つたまゝに。

鳥はさつきから放して欲しいか、口を開けてちき〳〵と手を嚙まうとする。少し指を緩めると、暗い中でもやはり放れたいと見えて身を藻掻く。—何故に祖母は探しに來ない。もう考へられる悲しい事は、いく度も同じ事を繰返して考へた。祖母達はわたしがゐなくとも、探さうともしないで忘れてゐるのではないかと考へるとつまらない。—わたしはもう飽きたから、不平な心持に戸を開けて、そつと開けて外の石段に出た。と、手に握つてゐる鳥を見ると、ぢつと目を閉つてゐる。口を突つついて見ても、やつぱり固く目を閉つてゐる。遁げないやうに兩手の掌を緩めて見ると、ぐつたりしてじつとしてゐる。首をぐつたり俯れて、冷たくなつてゐる。やがて、それは鳥が死んでゐるのだとわかると、わたしは急に愕き惑うた。どうすればいゝかと困つたまぎれに、自分で自分のすべき事を知らないなりに、つとその儘それを暗い倉の中へ投げ込んで、追はれるやうに、すた〳〵と居室の方へ駈けて歸つた。

人のものを惡い事をしたのだから、どうしようかと氣が咎める。殺された鳥が恨むのだと思へば薄氣味が惡い。

此方へ歸つて來ても、三千代や祖母のゐる處へは行けないから、そつと、いつも這入らない方の室を拔けて、女中のゐる方を求めて行つた。だれかのゐる處へ行つてゐなければ、間が惡い。三千代はその大事な鳥のゐなくなつてゐることにはまだ氣がつかないらしい。

一三　返らぬ日　(二)

もうそろ〳〵夕闇の迫る頃を、わたしは罪を包んだ、後暗い心持を抱きつゝ、唯一人、人通もない門口に出て悄れてゐると、三千代が出て來て、

「あの、あの。」とわたしを探し求めてゐた樣子で話しかける。

カナリヤが何處かへ逃げていつてしまつたと告げるのだ。さう言つて、三千代は泣きたさうな眼つきになる。わたしはなんとも言ひ得ずに、雨落溝に雨曝れた小砂を弄くりつつ俯いてゐた。あの鳥は私がどうもしたのではない。持つてる內に一人で死んでしまつたのだからと言はうとしても、やつぱり自分が惡いのだから、言はれない。そんなことをも知らぬ三千代は、暫く、取りつく島もないやうに立ちつくしてゐたが、その內に、

「千さんには私の物はどれでも上げるから、もう壹問の仲を直して下さいな。」といふ。

「なんでもいるものを上げるから。」とさういひつゝ、隱し得

ぬ涙を睫毛に見せてゐるのだつた。わたしも默つて涙ぐんだ。何と言へばいゝかに惑ひつゝ、知らず知らず涙ぐまずにはゐられなかつた。

それから夜寢るまでも、わたしは自分のした事が悔いられた。さうして、やはりその事の忘れられぬ翌る日となつた。

わたしは尙だれにも隱してゐた。祖母なぞを見るとなんだか、もうちやんとそつくり知つてゐて、さうして默つてわたしの自白するのを待つてゐるかのやうに思はれて、心が咎めた。學校へ行けば、先生の目つきが、わたしのした事を見拔いてゐるやうに見えて後めたい。——わたしは子供

であつても、惡い事をして隱してゐるといふ事のいかに心持惡いかが、十分にわかつた。

學校から歸ると、そつと倉を開けて這入つて、昨日の亡骸を探して見たが、どうなつてしまつたものか、そこらを見廻しても、わたしの投込んで行つた鳥が見えないのである。ごた〳〵したものの間まで探して見ても見つからない。

——わたしはそれが又氣にかかつた。

その後何日か經つた。そうして、その內にいつしか其の死骸の事も漸く忘れてしまつてから、或日、町はづれへ竹を取りに行くために、祖母に隱れて、倉の棚にある道具箱から鋸を出しに倉へ這入つて行つた。棚の上を探るには足元

が暗い故、ぼろけた、長持の上へ上つて、横手の明り取の窓を開けて下へ下りると、その長持の側に、例のカナリヤの黄色い抜け毛が一本、ふはりと落ちてゐるのが目に附いた。よく見ると、そこの提灯を入れた箱の置いてある處には、ばらばらと澤山落ちてゐる。その箱と、手の取れかけた古桶との間にも固まつた毛が散らかつてゐる。――鼠がしたのだ。悪い鼠が食うたのだと氣がついて、その固まつたのを搔き出して見ると、その中から、食ひ切られたやうにぽつくりと取れた片足が出て來た。長い小さい爪の附いた指を閉ぢ合せたまゝかち〳〵になつたのが出て來た。わたしは、こんなに片足ばかりにされてしまつた鳥を哀れに思ひ入る

中に、鼠の仕業が悪くてならなくなつた。それも結局は自分がした事だ、自分の罪だと思ふと、心持悪く自分に責められる。

わたしはその散らばつた鳥の毛をその儘にして置くと、自分のした事が解つてしまふゆゑ、すつくり拾ひ集めて、人の目に見えぬ處へ――氣味の悪い干切れた足と共に、長持の向うに落してしまつた。さうして、もうそれで以て、鳥の事も片足も忘れてしまはうとしたけれども、やはり時々思出しして祖母の前に出ても氣が咎めた。（鈴木三重吉）

一四　麥秋

文學士*
文士

六月になつた。麥秋である。「富士一つ埋み殘して若葉かな」。其の若葉の青暗い間々を、熟した麥が、一面に日の出のやうに明るくする。農家の生活戰爭中の最劇戰は六月である。六月初旬は小學校も臨時農繁休をする。猫の手でも使ひたい時だ。初旬には最早蠶が上るのだ。中旬には大麥、下旬には小麥を刈るのだ。梅雨に入つて、じめ〳〵した日がつづく。蓑笠で田も植ゑねばならぬ。水田勝ちの村では、田植は一仕事だ。田植をしまふと、さば〳〵する」。と皆が云ふ。雨間を見ては、刈り殘しの麥も刈らねばならぬ。刈り遲れると、畑の麥が粒から芽をふく。油斷を見すまして、增長繁茂して來た草も取らねばならぬ。甘藷の蔓

*谷口蕪村の句

もかへさねばならぬ。陸稻や黍・稗・大豆の中耕もせねばならぬ。二番茶も摘まねばならぬ。飯料の麥を水車に持つて行つて、搗いて來ねばならぬ。それに最早繭買が甲州街道に入込んださうだ。

田舍の麥秋

空には、まだ雲雀が根氣よく鳴いて居る。村の木立の中では、何時の間にか栗の花が咲いて居る。田圃の小川では、よしきりが口やかましく終日騷いで居る。杜鵑が啼いて行く夜もある。梟が鳴く日もある。水雞がことことと叩く

宵もある。螢が出る。蟬が鳴く。蚊が出る。ぶよが出る。蠅が眞黑にたかる。蚤が跋扈する。かなぶん・瓜蠅・天道蟲、野菜に附く蟲は限もない。皆生命だ、皆生きねばならぬのだ、到底取りきれる事ではないが、うつちやつて置けば野菜が全滅になる。取れるだけは取らねばならぬ。此方も生きねばならぬ人間である。手が足りぬ、手が足りぬ。家の人だけではやりきれぬ。はては甲州街道あたりから地所にはなれた百姓を雇うて、一反何程の請負で、田も植ゑさせる、麥も刈らせる、それでもまだやり切れぬ。大病人の外は手をあけて居る者は一人も無い。盲目の婆さんでも手さぐりで茶位は沸かす。豌豆や隱元が畑に珠數生りしてゐ

ても、もいで煮て食ふ暇は無い。如才ない東京場末の煮豆屋が、鈴を鳴らして來る。飯の代りに黍の餅で濟ます日もある。その時刻になると女の兒が、片手に大きな藥罐、片手に茶受の里芋か餅かを入れた風呂敷包を重さうに提げ、小さな體を歪めて、お八つを持つて行く。此の季節に農家を訪へば、大抵は門をしめて居る。猫一匹居ぬ家もある。何を問うてもくる〳〵とした眼を瞠つて、「知んねえや。」と答へる五六歳の女の子が、赤ん坊と唯二人留守して居る家もある。

（德富蘆花）

一五　朝の庭

萩の若葉の心のところに油蟲がついて居る。又それに蟻が群がつて居る。よく見ると、油蟲は時々痙攣を發したやうに動いて居る。蟻は其の上を無造作に這うて居る。萩は一體己をどうする積りだと言つたやうに、痒さうに首筋をもたげてぢつとして居る。

其の萩の下に蟻が塔を作つてゐる。梅雨がぽこぽこと柔かくした土を山のやうに積み上げて居る。何匹とも數知れぬ蟻が其の山の上を右往左往して居る。五六匹の蟻が頭を突合はして何か談合してゐる樣子であつたが、やがて慌ただしく連立つて巣の中に這入る。又連立つて巣の中から出て來る。

何處やらに蠅のうなる聲が聞える。

庭の芝生に菌が生えて居る。毎年梅雨の頃には此の菌が生える。白い小さい菌で、一處に十許りもかたまつて生えて居る。又芝生には小さい草花が生えて居る。それは斯うやつて芝生にしやがんで居ると始めて目に入るやうな小さい花である。小さい莖の先に白い小さい莟が附いて居る。小さいと言へば、芝の先に一つ〳〵宿つて居る露は非常に小さい。裳や下駄を濡らすのは此の露だ。それよりも愈小さいのは菌の傘の端に宿つてゐる露だ。傘の端のぎざ〳〵になつてゐる、その一つ一つの先にある露だ。

白い蝶が三匹もつれて松の樹の向うに飛んで居る。

睡蓮の莟が少し締りをゆるめてゐる。

一番電車が通る。

雨氣がすぐ近くの山の上に迫つて居る。隣の庭の松の樹をも靄が包んでゐる。

芝生に樣々の蟲がゐるのに氣がつく。其の中に小さいばつたが居る。私の下駄の影を恐れて逃げまどふ。芝にしがみついて居る一匹の蠅が目にとまる。これは今やつと生れ出た儘であらう、羽が極めて綺麗で、全體が薄紫色をして居る。それに二つの黑い眼が非常に大きい。

蝶が殖えた。七八匹も松の樹の間を飛んで居る。

二番電車が通る。

（高濱虛子）

一六　父の著物

亞米利加の大富豪、ロックフェラァがまだ年盛りの頃、何處へ出掛けるにも、見すぼらしい服を着て平氣でゐるので、仲のいい友達は氣が氣でなかつた。

友達は何れもおめかしや揃ひと來てゐるので、ある日の事辛抱がしきれないで、ロックフェラァに注意をした。

「いつか中から、一度言はう言はうと思つてゐたが、君の身裝は餘りぢやないかね。」

ロックフェラァは腑に落ちなささうに友達の顏を見た。

「どういふ意味なんだね、僕の身裝は餘りだと言ふのは。」

友達は情無ささうな顔をした。ロックフエラァが生れて一度も新約全書を讀まなかつたと自狀したところで、まさかそんな表情はすまいと思はれる程の顔だ。

「どういふんだか、一寸見たらわかりさうなものぢやないか。僕達と比べてみたまへ、君の身裝は隨分見すぼらしいぢやないか。」

ロックフエラァは漸と氣が注いたやうに、友達の身裝と自分のとを比べて見た。

「別に見すぼらしくは無いぢやないか、唯君のが綺麗過ぎるんだよ。」

「だつて……」と友達は焦慮つたさうに言つた。「君は吾々の

仲間で一番富豪なんぢやないか。」

「さうかも知れんな。」

と富豪は相變らず平氣な顔をして言つた。

「それにしたつて僕は別に見すぼらしくも思はんが……。」

「みすぼらしいよ。何と言つたつて見すぼらしいよ。」

と友達は自暴になつて喚いた。

「第一に君の親父の事を考へて見給へ、親父さんは何處へ出るにもちやんとした身裝をしてゐた。」

「さうだつたかなあ。」

とロックフエラァは白い齒を出して笑ひ出した。

「だが、君、今僕の着込んでゐるのは、其の親父の著物なんだ

よ。」

一七　母と蘆

*名は淳介
詩人
新聞記者

ふるさとの母をおもへば、
片岡の蘆もなつかし。
さやさやと風のわたれば、
靡きよる夕の穂波、
わが母の眉をしのばせ、
しめやかに雨ふる夜半は、

*（薄田泣菫）

そことなき葉ずれのひゞき、
わが母の聲音にまがふ。
ふるさとの母をおもへば、
かの青き蘆もなつかし。

＊　＊　＊　＊　＊

少年時代、私は東京を離れて一年ばかり奈良の古都に近い田舎で暮らしたことがある。うまれて始めて両親の傍を離れたので、私は明けても暮れても東京の空を眺めては、あの明るい銀座の街の灯を戀ひしがつた。

私が居た家の裏手は小高い丘になつて、そこには青蘆が

一面に生え茂つてゐた。私の室の窓の障子を明けると、すぐ眼の前にそれが見えた。畫間は丘のうへにコバルト色の空が覗いてゐた。をり〳〵白い雲が流れた。蘆のなかでは葦切が玉を切るやうな音を立てた。夕ぐれには、何處ともなく次第に黝く煙のやうにせまる暮色のうちを、冷たい夕風がさやさやわたつてきて、蘆の細い葉をゆるがせた。私が一ばん好きなのはこの夕風にそよぐ蘆の葉を見てゐることであつた。あちらに黑く、こちらに白く、風に靡いて光りかげる蘆の穗波を見てゐると、それがいろいろに人の眉・鼻・口などを描くやうであつた。殊にそれが優しい顏附に見えたので、私は懷かしい母の顏を思ひだした。私はじ

つと眼をつぶつて其の蘆の生えた丘の面いつぱいの巨きな白い母の顏を想ひ浮かべた。さうして、うすら冷たい風のなかで、ひとり「お母さん」と、なつかしく、涙ぐましく叫ぶのであつた。

また其の時分、私は毎晩一里の路を歩いて、奈良の町まで英語を習ひに行つた。嫩草山の麓にギンポールといふアメリカ人のお婆さんが住んでゐた。もう七十に近い齡で、年中眞黑い服を着て、赤くただれた兎のやうな眼に大きな眼鏡をかけてゐた。その人に夕方の六時から七時まで英語の讀方と發音を敎はり、それから溫いおいしい紅茶を御馳走されて歸つてくる時分には、もう田圃のなかの夜路に

はとつぶり日が暮れてゐて、蛙の聲だけが諸方に寂しく聞えるのであつた。

かうして獨り丘の徑を下つてくるときに、兩がはの蘆の葉のさらさらとそよぐ音は、恰も彼等が內證でなにか囁きあつてゐるやうであつた。時には多數の人が其の葉かげに集つて何かひそ〳〵話してゐるのではないかと思はれることがあつた。さうして其の聲の中に、殊更聞き覺えのある懷かしい母の聲が聽きとれたやうに思へた。

しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、とりわけさうした感じが深かつた。室へ戻つて戶を締めて床に就いてからも、やさしく諄々と諭すやうな母の聲音が、いつまでも、いつまでもしみじみと耳もとに響いてゐるのであつた。

其の頃の母戀ひしさの心を歌つたのがこゝに掲げた「母と蘆」といふ一篇の詩である。

（西條八十）*詩人童謠作家

一八　安宅

いたはしや義經は、兄賴朝の疑をうけしかば、京にもその身を置きかね、藤原秀衡を賴らんと思ひ立ち、時しも春のはじめ、風まだ寒き北國路を、奧州さして落ちて行く。

主從僅かに十二人、辨慶を先達に山伏姿に身をやつし、日數程經て加賀の國、安宅の關に着きにけり。

義「いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特に關を設けて、山伏をきびしく取調ぶる由、如何にすべきぞ。」

辨「これはゆゝしき御大事なり。きつと、これにて御工夫あるべし。」

人々「いや〳〵何程の事かあらん、ただ打破つて御通りあるべし。」

辨「いや〳〵打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべくは穏かなる手段を取りたし。」

義「然らば辨慶ともかくもその方の工夫に任せん。宜しく計らひくれよ。」

辨「畏まつて候。先づ考へ出したることは、我等かく山伏に身をやつせども、包みがたきは我が君の御品格なり。畏れながら、しばらく強力に御身をやつされ、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし。さなくば忽ちに見出され候はん。」

義「げに〳〵、これは尤もの事なり。姿をやつし主從は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば、關の役人富樫左衛門、

富「やあ〳〵、山伏、關なるぞ。名をなのれ。」

辨「承つて候。これは奈良東大寺建立の爲に、北陸道を勸進する山伏にて候。」

富「それは殊勝の事なれども、山伏なるからは、この關は通しがたし」。

辨「して、そのいはれは」。

富「されば なり。頼朝・義經御不和により、義經殿には山伏と姿をかへて、奥州へ落ちらるゝ由、故に諸國に新關を設けて、山伏をかたく止むるなり。一人も通しがたし」。

辨「承つて候。しかし贋山伏をこそ止めらるゝならめ、まことの山伏を止めたまふ必要は候はじ」。

富「あらむづかし。論より證據なり。まことと東大寺建立の勸進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ。こゝにてそれを讀み上げられよ。某これにて聽聞せん」。

辨「何と勸進帳を讀めとや。心得申して候」。

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中よりあり合せの卷物一つ取出し、勸進帳と名づけつゝ、卽智を以て文を綴り、まことしやかに聲

安宅の能の舞臺面

高々と、天も響けと讀上げたり。

富樫つくづく聞きすまし、

富「最早疑は晴れて候。　御通り候へ」。

辨「かたじけなく候」

げにや、紅は園生に植ゑてもまぎれなし。後に從ふ强力を、富樫目早く見とがめて、

富「いや、暫く。その强力は通し難し。とどまれ」。

とのゝしりぬ。すは我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ちどまる。

辨慶騷がずそらとぼけ。

辨「やい、强力め、何とて早く通らぬぞ」。

富「いや、それはこなたより止めたり」。

辨「そは又何故」。

富「あの强力が姿、義經殿に似たるゆゑ」。

辨「奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しかいはるゝ强力めは、一生の名譽ならんが、さりとては腹立たしや。けふのうちに能登境まで行かんと思へばこそ、强力雇ひたるに、僅かの笈を重げに負ひて、人々に後るればこそ、貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し、いで、こらしてくれん」。

金剛杖をおつ取つて、さんざんに打擲す。

これはと驚く人々を、辨慶目にて制しとめ、尙も激しく打据うる。富樫やうやく疑念をとき、

富「これは我等が誤なり。その強力には構ひなし。とくとく一同御通りあれ」。

いふに人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばさらばと立ちあがり、關路をあとにしづ〳〵と、奥州さして下りけり。

（坪内逍遙*）

* 名は雄藏
文學博士
評論家
飜譯家
劇作家
早稻田大學名譽教授

一九　雷の話

西の空に、むくりむくりと入道雲が現れて太陽を掩ふと、ごろ〳〵と遠方で二つ三つ雷鳴が起る。こんな日は、雷の嫌ひな人は、朝から氣分がよくない。一體雷が鳴るのは、雲が澤山出來て、その或ものには陰の電氣が、他のものには陽の電氣が一杯溜まつて、それが接近すると兩方の電氣が一緒にならうとし、終には猛烈な勢でその間の空氣を飛び越して、互に交合ふので、その時電光と雷鳴とが起る。之を放電といふが、電光は交合ふ時の道筋の空氣が強く熱せられる爲に起るので、同時に其處の空氣は押除けられるから、一瞬時稀薄になるが、直に後へ戻つて其處を埋めようとする。その勢が猛烈な爲に、空氣に大きな振動が起つて發する音が即ち雷鳴である。學校で先生が何か電氣の實驗をする時、火花が飛んでぴち〳〵音がするが、その音もやはりこれと同じ理窟で起る音なのである。

畫に書く電光は、誰でも知つてゐるが、實際あのやうな形

のものであらうか。諸君が、夏の夕涼みに、崩れかゝつた雷雲を注意して見るならば、雲の内に閃く本當の電光の形を知ることが出來よう。電光の通る道は居眠りをした時の筆記のやうに、出鱈目に曲つてはゐるが、西洋や日本の畫にある電光形とは少し違ふ。この電光の閃く時間は、一秒時の百萬分一位の短いのもあり、長いのでも、十萬分一には達しない。而も電光の通る道は、往々二里にも二里半にも及ぶことがあるので、電光石火とは、よく言つたものである。世に、火の玉とか人玉とかいふものがあつて、それが出た家では人が死ぬとか、或は幽靈の附き物だとか云つてあるが、若しそんな物があるならば、それは隕石でなければ、この電

光の一種であらう。實際球が靜かに動いて行つて消えるといふやうな放電は、實驗室でも稀に電氣の機械に起つたといふことを、多くの學者が報告してゐる。

さて、雲と雲との間に起る放電は、一向我々には害をしないが、そのやうな電氣を含んだ雲が地面近くに出來ると、その下の地面には、それと反對の電氣が生じて、放電をするので落雷が起る。何れにしても、その電光が短い時は、一つきりの音を發するが、長くて枝を澤山出してゐる時には、ぽきんぽきんといふやうな、幾個もの音が、連續して聞えて來るのである。併し、時々音が高くなつて、いつまでも轟いてゐるのは、多くの雲に反響した音が、時々合はさるからで、御寺

の鐘が唸るのと同じ理由である。山地では、雲の他に、あちらこちらの山にも反響するのである。

絶對に落雷を避けるには、家の周圍をすつかり金網で張るのであるが、そんな事は出來ないから、比較的效力のある避雷針を用ゐる。これは地面に出來た電氣をこの尖端から徐ろに空中に散らしてしまふのであるが、いくら避雷針だからといつて、激烈な雷には效果が無い。殊に、不完全なものは反つて落雷を誘ふやうなものである。併し、雷雨の時は次ぎの注意さへすれば、滅多に擊たれることは無い。

第一、雷が鳴る時は決して外出せず、家の内にゐても、成るべく室の中央に、腹這ひになつてゐるが宜しい。昔から蚊帳の内に居れば、擊雷を脱れるといふのは、蚊帳を吊れば、いやでも室の眞中にゐることになるからであらう。緣側に出、また柱に倚つかゝるのは大禁物である。それは假に屋根の棟に落雷したとすると、電氣は家の柱や壁を通つて放電するからである。

第二、雷雨の時は、鐵の物を身に著けたり、手に持つてゐてはならぬ。十數年前、東京中で三十何箇所の落雷があつた時には、運動場に居た士官學校の生徒が、帽子の徽章から感電して、燒火箸を田樂ざしにしたやうに、腦天から爪先まで、燒け爛れた穴があいて死んだり、臺所で庖丁を使つてゐた細君がやられたりしたことがある。第三、野原などに出てゐて、避難する暇の無い時は、乾いた地面で

も草の上でもいゝから成るべくぴつたりとうつ伏すがよい。雨が降つてゐたからといつて傘をさしたり、樹木の下に雨宿りをしたりするのは、命知らずのしわざである。野中の一軒家とか、山の頂に居ることも、危險極まることである。

（原田三夫）*

理學士
著述家

二〇　七夕祭

七夕祭は田舍の少年少女にとつては樂しい年中行事の一つである。

夜毎に銀河が近く、はつきりと見えるやうになつて來ると、少年少女たちの頭には笹に吊した色紙が浮かんで來るのである。

野天に焚かれてゐる田舍の風呂の中で、私たちは父親から牽牛星や、織女星を指さして教へられた事があつた。

何といふ星であらうか、銀河から少し南西に寄つて三角形を作つた星群がある。そして頂點をなした中央の星だけが紅く見えるのである。

徳川時代の七夕祭

「眞中の星さまが紅いだらう。あれは左右の星さまを擔いでるからだ。右と左の星は秋の收穫だ。だから豐年になればなるほど右と左の星が重くなるので、眞中の星さまの顏が紅くなる。」といふやうな父の話を、私たちは野天風呂の湯をばちやばちやさせながら聽いたものであつた。

雨が一粒でも降れば天の川が溢れるので、牽牛星と織女星は逢ふことが出來ないといふやうな話も聽かされた。

「かはいさうにまた雨が降つて來た。」と言つて、牽牛星や織女星の不運を悲しんでやる女たちもあつた。

七夕の夜は全く雨になることが多かつた。

私たちは三日も四日も前から紅・白・綠・黃・淺葱・青・黑などの

色紙を買つて來て、短冊を拵へては、朝早く起きて蓮や稻の葉の露を集めて墨を磨つてそれに字を書いた。六日の朝は山から大きな男が、葉のついた男竹を擔いで賣りに來るのであつた。

他家の竹よりも自家の竹が大きくて丈が高いといふのが、子供心にも矜りであつた。

姉や妹たちは五色の紙で着物を裁つて星にさゝげるのであつた。

少年少女達の身になると、七夕の宵に雨が降るといふことは、牽牛星や織女星のためよりも、むしろ自分等の七夕棹が濡れることのために悲しかつたのであつた。

私たちが雨に濡らすまいと思つて、七夕棹をどうかしようとする、親たちは「雨が降つてゐても、七夕さまは短冊を見て下さるから……」と言つて私たちの手をとめた。

雨は大抵嵐をつれてゐたので、笹に結へつけられた色紙は自由に飛んで、茄子畑だの黍畑だのへ散つて行つた。

あの頃のやうな素直な心は失はれてしまつた。

七夕祭だの灌佛會だのがだん〳〵忘れられて行くやうに、自分の心も年々がさつな、かたくななものになつて行くやうな氣がしてならぬ。

（吉田絃二郎）*

二一　月見草

*名は源次郎　文士　早稲田大學講師

月見草は私の好きな花の一つである。とり放して言へば、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさとあの清新な鮮かさと、又その花を見る夕暮や曉のすがすがしさとは、月見草のほのかな黄色を言ひ難くなつかしいものに思はせるのである。

自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗いうちに、狹苦しく滿員になつてゐる停車場の旅亭を出て、同宿のT君やM君と新舊兩市街の間の野原を歩いた。月見草が曉に近くいくらか萎れかかつて、限りもなく咲き續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉少なに並んで歩きながら、何と

も言へず親しい氣持になつて又旅舍に歸つた。

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを眼のあたり見た。二階の欄干に凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急にふくらんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開く音を聞いて悟をひらいたといふ話をかすかに想ひ起しながら、急いで庭に出て月見草の傍にしやがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣をつゝんでゐる蕚が後退を始める。蕚が開くと卷かれてゐた花瓣が次第にふくらんで來て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると四つの花びらが一緒にふうわりと開いて來て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻をうつときの氣持はなんとも言はれない。明日の朝になればしぼんでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても固より悟は開けない。併し悟が開けなくても、新しく咲く花を見まもる靜かな愛のこゝろは、本當にありがたいものであつた。

（阿部次郎*）

*文學士
東北帝國大學教授

二二　小さな笠

私が女學校の二年生の時と記憶してゐます、夏休みが來て一同が暫くの別れの言葉を交した時、仲のよかつた柿沼さんに

「お休みの中に、一度私の田舍の家へお遊びにいらつしやいな。裏山には白百合の花がいつぱい咲いてゐますから。」

と言はれて、私はあの氣高く美しい白百合の花がほしくなつて、きつと遊びに行くと約束をしました。

その後も幾度となく懷かしい柿沼さんの御手紙が屆いて、その度毎に、白百合の美しい盛りのことが記してあつたので、たうとう、お母さんのお許しを得て、お友達のS子さんと一緒に、柿沼さんのお家へゆくことにしました。

お天氣の好い或日、朝早くS子さんと二人は輕裝して出立ちました。町を離れておひ〳〵野道にかゝつた頃、太陽は曉の雲を破つて昇り始めました。二人は小さいパラソルを眞夏の陽に翳しながら、ひたすらに行く手を急ぎました。そして一時も早く、白百合の咲く村に着きたいと願つて居りました。

「柿沼さんのお家はきつと大きいわね。」

「ええ、お父様は村長さんで地主なんですつて。」

「御門があるわね。」

「きまつてゐるわ。冠木門よ。」

「だつて、西洋館で鐵の門かも知れないわ。」

「もつとハイカラで、大理石かも知れない。」

「まさか……」。

こんなあどけない會話を續けながら、笑ひ興じてS子さんと私は田畑の中に續く海道を歩いてゐました。

そのうち、二人はだんだん疲れて來ましたので、路の傍にある小さい森の中に入つて、木の切株に腰をかけてやすみました。

日の光のかすかに洩る森の中の靜けさ。お伽噺に出て來る一寸法師の踊りさうな、柔かく仄かにほふ草の上の涼しさは、疲れた私たちの身體をどんなに慰めたでせう。

その時、私は切株の上に小さい一つの菅笠を見出しました。

「あら、あの笠は何でせう」。

「誰か忘れたものかしら」。かう言ひながら、私はその小さい笠を手に取りました。笠の裏には可愛い赤い結び紐がついてゐます。そして「同行二人」と墨で黒々と書いてありました。

私が、その笠をもとの切株の上にそつと置くと、間もなく草をさやさやと分けながら、森の奥から幼い、いたいけな女の子が手に白い百合の花を一枝持つて出て參りました。それはあの雜誌の口繪で見たやうな、草鞋ばきのかひがひしい身なりの、小さい順禮の子でした。その少女の顏は、月

光に濡れて咲くヒヤシンスの葩のやうに蒼白く、双の瞳は海底に沈んだ黒眞珠のやうに圓らに、淋しく潤んでゐました。

「これ、あなたのだつたの。」

私は、笠を自分の手に取つて示しました。順禮の子は靜かにうなづきました。

その子の手に笠を渡す時、私は聞きました。

「同行二人とかいてあるのね。誰といつしよ、お母さんと、お父さんと。」

順禮の少女は、輕く首をふりました。そして靜かなしかしさびしい聲で答へました。

「あの、弘法さまと。」

「……。」

右と左に分れゆく追ひ分けの道で、この順禮の子に私たちは別れました。

「順禮さん丈夫でお歩きなさい。さよなら。」

「はい。おふたりさま。さよなら。」

私たちは路のほとりに立つて、はるかに遠いかなたへと、次第にさりゆく小さい笠の、白百合の花の一枝をささげた姿を、いつまでもいつまでも見送りました。そして、いつの間にか二人とも、はづかしいほど涙に頬を濡らしてゐましたの——。

（吉屋信子*）

*創作家

二三　大震災の記（一）

大正十二年九月一日、ちやうど晝飯の食卓に向はうとする時だつた。突然からだを投げ出されるやうな大激動を感じた。地震だと思つたが、固よりあんな大烈震にならうとは豫想せず、最初は柱時計の墜落しさうなのを支へてゐた位だつたが、そのうち方々の壁が脱ける、棚の物がが た〳〵落ちる。家全體がぐわらぐわらとまるで大瓦石を懸崖に投げるやうな大音響と共に、今にも倒潰しさうな大震動を始めた。もう時計どころでなく、立つてゐる事も出來なくなつて、自分は夢中で、側に泣叫びながら、きり〳〵舞をしてゐた二人の子供を兩腋に抱へ込んで、簞笥の前にへたばつた。震動はます〳〵烈しく、いつ止むとも覺えず、長男は緣側から庭に

飛び出して、物干杭につかまつて泣叫んで居り、臺所にゐた妻は激震と同時に其の場に打倒れた赤ん坊を引抱へて外へ飛び出して居り、妻の叔父と下女とは玄關口で何か大聲に叫びながら右往左往してゐた。自分は逃げ出すにも逃げ出せず、屋内にゐるのも恐ろしくてたまらず、極度の狼狽、困惑の裡に、ただ夢中で、ちりぢりになつてゐる外の者たちに向つて、家へ入れとか、逃げ出せとか、自分にもわけのわからぬことを大聲でどなつてゐるばかりであつた。其の中襖が倒れてくる、簞笥の上の鏡臺がすぐ眼の前に轉び落ちてくる、それらを見た刹那、自分はもうだめだと思つて、子供を兩腋にしかと抱きつけたまま外へ飛び出さうとした。と、其の瞬間に震動が稍緩やかになつたので、また其のまゝ腰をおろした。そして全く震動が終つてから、ほつと胸を撫で下しながら跳足で外へ

出て見ると、近所の人たちも皆取亂した姿で飛び出してゐたが、誰も物はいはず、只々恐怖に慄へた眞蒼な顏を見合してゐるばかりであつた。

間もなく搖り返しがやつて來た。最初のと殆ど變らぬ程の激動だつたが、自分等は隣家との境の竹垣の根元に、一塊に身を寄せて難を避けた。そして家の者にも、火の用心をしてくれと注意して、震動が收まると同時に、尙危險を慮つて、近くにかなり廣い原つぱがあるので、取敢へず其所へ家族を避難させた。

其の場合私の最も恐れたのは火災であつた。大地震の後には、きつと火災が伴なふことを知つてゐたし、好晴ではあつたが、二百十日の大荒れを想はせる南の强風が吹き募つてはゐたし、おまけに水道が地震と同時にぱつたりと止つてしまつたし、ちやうど晝飯時の火の氣のある時だつたから、もしやと思つて非常に心配だつた。

所が、その矢先に、急にあたりがきな臭くなつてきた。驚いて四方を見まはすと、屋根や、壁が落ちた爲に、附近の空は灰色の土煙で濛々としてゐたが、火事らしい樣子は見えなかつた。が、暫くすると、南方の空に濛々と黑煙が立昇るのが見えた。さあ大變だと思つて、妻子等のゐる原つぱへ飛んで行き、なほよく樣子を見ると、火元はあまり遠くもなささうであり、且つ火の手が中々大きい。おまけに眞風上で、黑煙が自分等の家の上空にまで擴がつてゐるのだつた。

原つぱには近隣の人たちが百人ばかり逃げ出して來て、てんでに座蒲團を頭に被つたり、地上に敷いたりして、わい〳〵騷いでゐ

大震災直後家屋倒潰の狀（赤坂區）

る。其の中又第三回目かの激震が起つた。大地がゆら〳〵と眼に見えて搖れ、深く深く陷ち込んで行くやうな氣がして、人々の狼狽が一層甚だしくなつた。一方に火の手がますます大きく盛んになる。風は強い。皆大變だ大變だと叫びながら駈けまはつて歩く。私は子供等を妻の叔父と下女とに托し

ておいて、取敢へず極重要なものだけを取出さうと、机や本箱の抽斗から切拔の原稿や書類などを搔集め、妻は簞笥から何か取出してゐた。其の間に幾度かの餘震が襲つた。其の度毎に私は驚いて外へ飛び出した。どんなに氣を落着けようとしても足腰が慄へてならなかつた。茶の間の食卓の上には、壁土が一ぱいに被ひかぶさり、既に飯のよそはれてあつた茶碗などがひつくりかへり、棚などから落ちた鏡臺や箱や空罐などが部屋中に散亂し、慘憺たる光景を呈してゐた。

再び原つぱへ戻つて見ると、もう荷物など運び出してゐるものもあつた。急に空腹を覺えたが、家へ食べに行く勇氣がなく、飯櫃を持つて來させ、握飯を作らせたものの、中々咽喉へは通らなかつた。

二四　大震災の記(二)

火事は方々に起つて居るらしかつた。左手の方、小石川あたりの上空に、まるで眞夏の層雲のやうな物凄い黑煙が高く天に冲して居るのが見えた。誰いふとなく、*砲兵工廠が爆發したのだといふことが傳はつた、其の外麴町の九段附近や神田の神保町あたりが盛んに燃えてゐるとの報も傳はつた。

*小石川區水道橋外に在る

巡査が二人連れで、息を切らしながら駈けつけて來た。帽子の顎紐をかけ、帶劍をしつかり握り、非常に緊張した且狼狽した顏で、まるで逃げ惑ひでもして來たかのやうに原つぱへ駈込み、汗みづくの顏を拭ひもあへず、四方をきよろきよろ見廻しながら、其の中の一人が、

「あ、此所はいゝ、此所にゐれば、地震は大丈夫だ。此所は何番地だ。」と、私たちにいふのか獨語か何かわからぬやうな調子でどなり、更に大聲で、

「四時から六時までの間に强震があるさうです。震源地は江戸川沿岸で、關東一帶に大被害があつたさうです。それから火事に氣をつけて下さい、今方々に大火が起つてゐますから。吾々はその方へ行かねばならないので、こちらへ見廻りに來られないから。」と、叫ぶやうに言つて歸りかけた。

「あの火事は何處です。」

私は追蒐けて行つて南方の空に漲つて居る黑煙を指しながら尋ねた。

「*士官學校です。」

*牛込區市ケ谷本村町にある

「士官學校、そりや大變だ。」

皆一度にどよめき出した。そこまでは直徑にして七八町も離れて居るので、ふだんならば何處が火事かといふ風に、全く無關心で居るのだが、水道が斷たれ、風が強く、手の附けやうもないといふので、どんなことになるかも知れないと、非常な不安、恐怖に襲はれた。もう士官學校の圍を拔けて、[*一]加賀町に移つたとか、[*二]藥王寺町へ來たとか、好い加減な想像を交へて、自ら恐れ戰くものも多かつた。そして皆一旦逃げ出して來た以上、地震が恐ろしさに家には歸れず、併しその儘じつとして居るにも居られぬ樣子で、徒らにわやわやとうろたへ騷ぐばかりだつた。私は萬一の場合には早[*]稻田方面か戸山の原へ避難することに腹をきめ、子供の着換だけでも一まとめに持出すやうに妻に命じた。妻は叔父と共に家にかへり、

*一 牛込區にある
*二 牛込區の西方に當る

間もなく小さな風呂敷包と毛布とを持つて來た。自分達のものも何か持ち出さうかと言つたが、

「いらない、いらない。子供のものさへあれば澤山だ。その他のものは却つて邪魔になるから、何でも子供だけ連れて逃げ出せばいゝ。叔父さんと艶と四人で、誰でもいゝから、一人づつ連れて逃げるんだ。」

大震災に由る火災後の慘狀（神田區）

と私は制した。

その中急に風向が逆に變つた。同時に士官學校の火事が下火になり、黑煙が白く薄れた。私はほつと安心した。そして思はず大聲で叫んだ。

「大丈夫だ、大丈夫だ。士官學校が消えた、消えた。

官省や會社に勤めに出てゐた人々が、下町の方から續々と歸つて來る。そして原つぱへ避難してゐる家族達と、お互に無事を喜び合ふ。だんだん男が殖えて來るので、私までも氣强くなつた。

彼等は口々に自分の遭難談や、途中で目擊して來た慘害や火災について話した。警視廳[*一]が燒けてゐる。日比谷の松本樓が燒けた。建築中の內外ビルデング[*二]が倒潰して七八十人慘死した。帝劇[*三]や東京會館[*四]もあぶない。その他の丸の內の大建築は皆崩れたりし

*一 麴町區有樂町に在る
*二 麴町區八重洲町に當時建築中であつた
*三 帝國劇場麴町區に在る
*四 麴町區に在る

た。銀座の方に火が起つた。日本橋にも下谷にも、淺草にも、本所にも、深川にも、諸所方々に大火が起つてゐる。神田の三崎町・神保町方面は既に全燒した。九段上の火事もひどい。お茶の水や本郷の方も燃えてゐる。下町で滿足な家は一軒もない。牛込へ入つて來ると、この邊にも地震があつたかと思はれる位に靜穩で無事なので驚いた。でも、神樂坂[*]の銀行が倒れて、交番が粉碎された。柳町の銀行が倒潰して、その下の水菓子屋や肴屋・蕎麥屋・蓄音機屋が下敷になつた——さういふ恐ろしい物凄い報道が次から次へと傳はつた。

稍傾いた殘暑の烈日が、じり〳〵と燒けつくやうに草蓬々たる原つぱに照りつけて居る。空は青く深く、一點の雲もなく澄みきつて、思ひなしか、却つて物凄く、天變地妖の襲來を思はせる位、澤山

*牛込區、牛込見附外に在る

の蜻蛉の群れて飛んで居るのも、常とは異つて無氣味だつた。

夕方近く、一度家の中の亂れを取り方づけ、もう大丈夫だらうから、この儘居ようかとの話も出たが、さう言つてゐる間にも、頻々として餘震が起り、且夜中に强震が襲ふだらうとの警報があつたので、どうも無氣味で家に留つてゐる氣になれなかつた。殊に多勢の子供があるので、何よりも彼等のことが氣遣はれてならず、妻は割合に平氣で、冷靜で、家に留ることを主張したが、私はびく〳〵しながら、家に寢てゐるよりも、原つぱに野宿する方が、どれだけ安全で且無事だか知れないと言つて、それに從はせた。そして急いで、握飯をこしらへたり、私達の身の周りのものも幾らか持つたりして、復原へ出た。近所の人達も、廣い庭でも持つてゐない限り、皆そこに野宿することにしてゐた。で、私は一層丈夫に思つた。

その原つぱに居さへすれば、地震だけは安全だつた。もう最初のものほどの强いのが起らうとも思はれなかつたが、よし起つたとしても、この大地が裂けて、吾々が居ながら陷沒するやうなものでない限り、絶對に安全だと思つた。

「本當にいゝ原つぱが殘つてゐてくれたものだ。此處にごちやごちやと小さな借家などが建てられてゐようものなら、逃場がないのだつたのに、有難い…」

こんなことを誰も彼も言ひ合つた。只火災だけが心配だつた。士官學校が鎭火して、今では牛込に一箇所も火事がないといふことが、非常に心安めにもなり、また有難くも思つたが、この混雜の場合、どこからどうして出火しないにも限らないと不安でならなかつた。そして、せめてこの近所からだけでも、どうか火を出さない

でくれと、それのみを私は祈つてゐた。

二五　大震災の記(三)

日が暮れた。東から北にかけての半面の空が眞赤に染まつて、物凄い大噴煙が、私達の頭上まで高く掩ひかぶさつてゐた。ドドン、ドドンと、遠雷の樣な響が、斷間なく聞えた。砲兵工廠の火藥の爆發だらうと皆噂した。現狀を見て來た人や、現場から逃げて來た人々は、誰も彼も下町の方は全部火の海になつて居るなどと、物凄い光景を口々に語つた。淺草の十二*階が倒れて、無數の死傷者を出したとか、順天*堂や駿河臺の多くの大病院が燒けて、澤山の病人がどうしたとか、帝國大學が燒けてゐるとか、三越や白木屋なども危險だとか、砲兵工廠の爆發で、死體が幾つも幾つも天から降つて來たとか、まるで嘘のやうな恐ろしい物凄い話ばかりだつた。

私はせめて神樂坂あたりまで樣子を見に行きたいと思つたが、後が心配で一歩も子供たちの側を離れることが出來なかつた。

夜が更けるに隨つて、一層悽愴の氣が增した。風は依然として強く、西方の空には星が降るやうに瞬き、銀河の流も見られたが、他の半面の空には、火焰の反照が益、廣く、濃く、深く、殷々轟々たる物の響も一層強く聞えた。暗黑な原つぱに、樹の蔭、叢の下に莫蓙や雨戸など敷いて、二十餘軒の家族が隣り合ひ向ひ合つて、寢轉んだり蹲つたり、恐怖に脅えながら、ぼそ〳〵と話したりして居るのを、數個の細々とした裸蠟燭の火が、ちら〳〵と明滅しながら仄かに照らして居る光景は、哀れに心細く賴りないものだつた。唧々たる蟲聲が一層あたりを寂しいものにした。

*十二層の展望閣凌雲閣と稱した
*本郷區湯島に在る有名な病院

時々大地の震動が起つては、寢て居る者が刎ね起き、坐つて居る者が飛び立ち上るといふことが幾度も繰返された。只子供達だけは、何も知らずに、したゝる夜露を被りながら、すや〳〵と寢入つて居るのが、涙ぐましいほど可憐だつた。私は、幾度も四人の子供の顏に帽子をかぶせ直してやつたり、蝙蝠傘をさし直してやつたりした。

十二時頃、火事を見に行つて居た妻の叔父が歸つて來ての話に、牛込見附から市ケ谷見附にかけての麴町の高臺の火災が、今にも見附上の土堤まで拔け出ようとする勢で、それが外壕を越して、牛込方面に移りはせぬかと、神樂坂あたりは避難準備をする者や、麴町から逃げ込んで來る者などで極度の混亂を呈して居るとのことだつた。その話も私達をひどく脅かした。まさかあの廣い壕

を越えはすまいと、强ひて心を鎭めようとしたが、水は一滴もない、大方の家は、屋根は瓦が落ちてむき出しになつて居る、それに連日の暑熱で乾ききつてゐる。若し萬が一にも何處かの屋根に飛火でもしたら、それこそ事だと思つた。べら〳〵と一嘗めにこの邊まで延燒して來るのは明らかだ。私はその場合を想像して、すやすや眠つてゐる子供をどんな風にして連れて逃げようかと、そればかり考へてゐた。戸山*の原へ行くのが最も安全だと思ふにつけて、どうかその方向に火災が起らないでくれと、始終背後を振り返つてゐた。

眞夜中の二時過ぎだつた、さすがにひつそりと靜まつてゐた原つぱの入口の方に、新しい話聲が起つた。近所の人が、大磯から急遽歸京したのだといふことがわかつた。私は側へ行つて、その人

*東京市の西郊陸軍射的場の在る所

の話を聞いた。その人は前日用事で大磯へ行つたのだが、晝間の激震と同時に、東京の自宅が案ぜられ、早速歸京しようとしたが、汽車がなく、やつと自轉車を一臺買つて、十時間ぶつ通しで東京まで駈け戻つたのださうで、その途中の被害の慘狀は迚も東京の比でない。途中一軒として倒潰しない家はなく、道路には大龜裂が生じ、汽車は顚覆し、鐵橋は破壞し、火災が方々に起り、無數の死傷者の阿鼻叫喚の中を夢中で逃げて來た氣持は、迚もお話も出來ないと言つた。殊に大磯、横濱間が最も激甚で、横濱の如きは全滅だといふ話もした。

「鎌倉あたりはどうですか。」

と私は尋ねた。

「勿論あの邊も全滅でせう。湘南地方は一帶にひどいやうです。

大磯でも、平塚でも、藤澤でも、大船でも、戸塚でも倒れない家は殆ど一軒もありません。殊に海嘯がやつて來ましたから、海岸の方は尙更助かりません。」

とその人が答へた。

私は大磯や鎌倉湘南地方に暑を避けたり住居をもつたりしてゐる數人の知己・朋友やその家族達はどうしたらうと、新に氣遣はれ出した。そして小田原や箱根あたりも同樣の災害を被つてゐるらしいと聞いて、家族連れで十日ばかり行つてゐた箱根から、ほんのその前日歸つて來た自分達の幸運を喜んだ。

不安な一夜が明けた。

「まあ、どうかかうか、お互樣に無事に一晩過ぎましたが、此の分にどうか何事もなくて濟んで下されればようございますが。」

かう私達はお互に、不安の裡にもともかくも一夜事無きを得た幸福を祝し合つた。

顧ると下町方面の朝空には、一面に漠々たる大火煙が漲り掩ひ、恰も夕燒に彩られた莊嚴な眞夏の大層雲を見る樣であつた。間もなく私達は、京橋も、日本橋も、神田も、淺草も、さては、本所も、深川も、昨夜一夜の中にその大半を燒き盡くされ、今や全市全滅の大慘害を免るべくもなからうといふ、驚くべき恐るべき報道を耳にした。更に續いて不逞の徒が、此の機に乘じて、この大天災のもたらした慘害を一層大きくしさうだといふことも、誰言ふともなく傳はつて來た。さうしてそれに對して各自警戒を一層嚴にすべき旨が傳へられた。一夜の無事を喜んだ私達は、ここに又新な、そして更に一層深刻な不安・恐怖に怯えずには居られなかつた。（加能作次郎）

*文士

二六　芙蓉の花

おそろしきなゐも去りたり。
靜かなるわが家の庭に、
今日も咲く芙蓉の花よ。

わが兒等はいつものごとく、
ふりたちて砂ほり遊ぶ。

今日のみは嗚呼わが兒等よ、
その赤き鋤ををさめよ。

おそろしきなゐと焔とに、
あまた世の幼兒どもは
親の手に抱かれつつ失せぬ。

芙蓉の花

その小さき鋤を見るだに、
あはれなる葬を偲ぶ、

我が胸はいま痛むなり。
今日のみは嗚呼わが兒等よ、
つゝましく傍に坐して
亡き友のために祈れよ。
あはれ幸うすきその魂ぞ、
かの白き芙蓉のごとく
うるはしく穢なかりし。

（西條八十）*

*詩人
童謠作家

二七　こゝろ

心柄といふものは、ほんのちよつとした言葉や行爲のはしにもあらはれるものである。

私の居た寺で、或時、銚子の川蒸氣の話が出たをりに、坊さんに「此處から銚子まではよほどでせうね」と聞くと、「いやたいした賃錢でもありません」と答へた。私は里數を聞いたのに、坊さんは大變なことを答へたものである。坊さんはこの一言で、自己が俗僧であることを私に知らせてしまつた。

また、ある時、三人の男が膝を交へて坐つて居た。その時、

女中がバナナを山ほどお盆に盛上げて持つて來た。そのバナナはまだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が、「はあ、いいな」といつた。一人は、「全く小笠原のは値ばかり高くてね」といつた。

三人とも親しい友だちだつたが、一人は畫家で、一人は商人、あとの一人はその珈琲店の主人だつた。畫家は其の時、色のかがやきを見た。商人は味を感じた。そしてその店の主人は値を考へて、一緒にハツと思つたのである。この中の誰の心が一番尊く磨かれてゐたか。

又かういふ事があつた。或歌自慢の人が眞間*に訪ねて來て、私に「歌を見てくれ」といつた。大概かういふ人の「見て

*千葉縣東葛飾郡國府臺に在る

くれ」は「教へてくれ」といふのではない。「驚いてくれ、褒めてくれ」といふのである。私にはさういふ人の心持はよくわかつてゐる。「かういふのはいけないのだ」といつた所で、わからう筈はなし、先方にほんとに教はりたいと謙つた心が無い以上、私の方でもむきになつてやりこめる必要はない。

そこで、私はその人もさういふ人だと直に見てとつたので「まあ、散歩でもして見よう」と一緒に外に連れだした。歌の自慢など聞くよりは、外へ出て雲でも見た方が、どれだけせいせいするか知れない。どうせ時間をつぶすなら、その方がよい。その人は途々何かしやべつて居たが、私は夕方の空や、田園の景色にばかり眺め入つて居たのである。

まだ赤い夕焼が西の空には殘つてゐた。眞間の小川の堤の上を歩いて行くと、ふとその人がしやがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると——何といふ可憐な繪模樣であつたらう。私は思はず立停つてしまつた。そこには、鮮かな裏白の葉の河楊が、水の面に搖れてゐた。その撓んで搖れてゐる一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽棲つて居た。又一羽來た。枝はいよいよ搖れる。枝の先は水について波を立てて居る。燕の子たちは紅い頰を揃へて、さもさも恐ろしさうに啼きたてる。又一羽棲ると、枝はいよいよ搖れだした。ともすると滑り落ちさうになるので、今は必死となつて縋りついて居る。そのつやつやしい黑い

裂羽、いた〳〵しげな鳴聲。それだけでも可愛いのに、また一羽、羽ばたいて、つい近くまではやつて來るが、枝の上の燕の子はそれを見て、慌てて「いけない、いけない。」と鳴く。これ以上棲つては枝がすつかり水につかつてしまふのである。空の一羽は、棲るには棲れず、寂しさうに鳴きながら、翔つては近より、近よつてはまた翔り出す。その燕に向つて小石を投げたのである。

私ははつとしたが、それでも默つてゐた。寂しい氣持で或處までその人を送つて行つて別れた。歌はたうとう見なかつた。見なくとも、もうどれだけの歌かわかつてしまつた。何故か。それは、この一事で、その人の心柄がまだ出

來てゐないことが、はつきり私にわかつてしまつたからである。「心」が出來てゐなければ、歌はできない。（北原白秋*）

*名は隆吉　詩人　文士

二八　松風

ある土地の長者の隱居が、新築の茶室で、獨り茶をたてて樂しんでゐると、どこから迷ひ込んだか、襤褸を引きずつた乞食が一人、つくばひの側に立つて、ぢつと茶室の内をうかがつてゐる。薄茶を一服飲んで、釜に水をさすまで、長者はこの不意の侵入者に心付かなかつた。「どうぞお茶を一服惠んでやつて下さいまし。」と、庭前から聲をかけられて、長者は驚きながらつか〳〵出て見て、いよ〳〵驚いた。しかし、

さすがに茶人だけあつて、はしたないあわてやうはしないばかりか、乞食のくせに薄茶を所望する風流氣に感心しかけた。暫く考へた末、むげに追ひ拂はうと思つた心を抑へつゝ、勝手元から取り寄せた缺け茶碗へ大服に立て、菓子をも添へて、庭の敷石の上に坐つて、作法どほりちやんと待つてゐる乞食の前に出してやつた。乞食は行儀正しく一服の薄茶を飲み了ると、厚く禮を述べて、裏口の方へ立ち去らうとしたが、また引つかへして來て、長者の隱居が首を傾けながら、もとのところに立つてゐるのを見上げ恐る〳〵言つた。「まことにありがたうございました。つきましてはこの御返禮と申すもをこがましうございますけれど、粗茶

一服差し上げたうございますから、わたくしの方へお越し下さりませんでせうか。乞食の分際で無禮なことを申し上げた失禮は、重々おわび申し上げまする。」

長者の隱居は、どこまで驚かされることかとあきれてしまつた。しかし、彼の好奇心はいよ〳〵動いて、「それでは、明日の八つ頃行きませう。何も構うて下さるな。」と人間並の約束をしてしまつた。喜んで歸つて行く乞食の襤褸に初秋の風が吹いてゐる。彼は長者の家から五町ばかり、この村を貫いて流るゝ綺麗な川に沿うて下つた所の松林の中に、蒲鉾小屋を造つてゐるといふ。

長者の隱居は、あくる日を待ちかねるやうな心もちにな

つて、其の夜を明かした。さうして、好奇心のかたまりとでも言はなければならぬ樣子をして、家人には告げずに、轉げかゝる風で、八つの刻限に、川添ひの松林へ入つて行くと、白い砂にさく〳〵足痕を長く引いて、岸まで出てしまつた。けれども、一向に蒲鉾小屋らしいものは見えぬ。はてなと首を傾けた隱居は、またも砂地に足痕を引いて、方々探し廻つた末、漸く松林の中に二坪ばかりの空地を發見した。いや發見したのは空地ではなくて、空地の眞ん中に筵を敷き、眞新しい素燒の土瓶に水を盛り、茶碗から茶筅・茶杓と、一切揃へた道具が置いてある。いづれも一番粗末な物で、また一番新しい物である。砂の上には石を四つおいて炭火を

おこし、水差しと同樣の土瓶をかけて、湯がたぎつてゐる。主人役の坐るべき場所は白紙を擴げて、四隅に小石をおき、ひき茶が靑く、美しく盛られて、三四服分はある。

「えらい」と隱居は、手を拍つて感心した。穢ない襤褸の姿を現さないで、長者に返禮をした乞食の心を奧床しく思つたのである。彼は悠々と自分の手前で、二服の茶を喫しつつ、松林の梢を渡る風の音を身に染みて聞いた。主のない筵の上で、素燒の土瓶に向つて、厚く禮を述べ、そろそろとまた砂地に足痕を印して歸路についたのは、七つの刻であつた。

（上司小劍）

*創作家

二九　秋を待ちながら

こどもたちが頻りに歌をうたつてゐる。それは彼等がつい先頃うたひ方を教はつたばかりの私の作つた童謠である。

お寺の前の
松の木で、
かなかな蟬が
ないてゐる。

かなかな蟬の
なく聲に
また今日の日も
くれてゆく。

かなかな蟬の
なく聲を
お小僧さんも
きいてゐよう。

かなかなかなと
けふもまた

日ぐらし蟬が
ないてゐる。

私はこの蜩蟬の啼く聲がたまらなく好きである。遠くの森でカナ〳〵といふ、あの澄み切つた淋しい聲を聽くと、何といふことなしに淡い哀愁が胸に湧いて、心がおのづと靜かになる。

今年も私は幾度となく蜩の啼く聲を聽いた。或時は丘の上の或大きな建物のがらんとした一室で催された歌會の席上、五六の人々と雲といふ題で歌を詠み合つてゐた夕ぐれ時に。或時はまた子どもたちを連れて山の墓地へ盂蘭盆の墓詣に行く途中で。しかし、今年聞いた蜩蟬の聲で、

最も深く胸にしみ入るやうに覺えたのは、能登の入口に臨んだ旅舍の二階で、夜明け方目の覺め際に聽くともなく聞いたそれであつた。

ふと目を覺ますと、水色の蚊帳を透してほのぼのと明けて行く、靜かな靜かな海が私の前に横たはつてゐた。寢ながら海を見ることの出來たのは、何といふ嬉しい事であつたらう。靜かな海の面には、まだ一艘の小舟すら見えなかつた。沖に横たはつた島は、まるで夢のやうに霞んでゐる。水のやうな涼しい海風がしきりに蚊帳をゆるがしてゐる。光はまださしてゐなかつたが、明るさから考へるともう間もなく日が出るらしく思はれた。私の心も眼の前に横た

はつた海のやうに靜かであつた。

と、その瞬間、その靜けさの底から、微かにあのカナカナカナ……といふひぐらし蟬の啼聲が私の耳にきこえて來た。カナカナカナ……その聲はとだえては起り、とだえては起り、幾度となく繰り返された。

「あゝ、かな〳〵が啼いてゐる。」

さう思つて私は枕につけてゐた頭を擡げたのは、幾度となくそれの繰り返されたのを聽いた後のことであつた。そしてそれと同時に、私にはその聲がどのあたりから聞えて來るのかと知りたいやうな氣がするのであつた。

私は起き上つて海に臨んだ欄干に身を寄せた。海はまだ先刻のまゝの靜けさを保つてゐた。沖の島もまだ眠から覺め切らないやうに見えた。私はその靜かな海に見入りながら、再びじつと耳を澄ました。カナカナカナ……蜩の啼く聲は、やはり微かに聞えた。しかもそれは靜かな海の面を傳はつて聞えて來るのであつた。恐らくそれは手近に見える松林の多いらしい岬からであつたであらう。それにしても、海を隔てて蜩の啼く聲を聞くといふのは、私には全く新しい經驗であつた。私はその時ふとこんな事を思つたりした。

「あの沖に見える島にも蜩がゐるだらうか。島で啼く蜩の聲を沖の舟の中で聞いたらどんな氣持がするだらう。」

われながら埒もない事だと思ひながらも、その場合何かとそれについて想像を働かして見ないではゐられなかつた。

（相馬御風）*

*名は昌治　文學者

三〇　月の話

（一）

月の話すには、昨日はあの家の狹い中庭を照らして見た。見れば、そこには牝鷄が一羽と雛子が十羽ゐた。すると、その家の可愛らしい小さな娘が出てきて、この鷄どもの周圍を跳ねまはつたので、牝鷄はびつくりしてこゝこゝと啼きながら、羽の

下に雛子を庇つて隱してしまつた。ところへ父親がやつて來て、娘は大層叱られた。わたしはそれきりで其の事は忘れて空を歩いて行つてしまつたが、丁度先程又その中庭を照らして見ると、何の音もしない靜かな處へ、急に例の娘が現れてきて、拔足でそつと鷄小屋の方へ忍んで行つて、やがてその小屋の門をはづして中へ入り込んだ。鷄はびつくりして小屋の中を馳け廻つた。すると、娘が頻りに其の後を逐つかけてゐるのが、小屋の壁の破れ目からわたしにも見えたので、怪しからぬ事だと思つてゐると、そこへ父親が出て來て、晝間の時よりも一層酷く叱りつけて、娘の腕を抑へつけた。わたしもやつと安心した。見ると、娘の兩の

目からは大粒の涙がはら〳〵落ちて居た。父親が「お前そこで何してゐたんだ」といつても何の返事もしないで、唯泣いてばかりゐたけれども、漸く「わたし鷄を抱いてやつて、昨日のことをあやまらうと思つたんだわ」と言つた。父親はそれを聞いて何ともいはずに娘の髪の毛をやさしく撫でてやつた。私もやさしい光で其の顔を照らしてやつた。

（二）

月の話すには、

風はなく浪もごく穩で、海の水は透き通るばかりに綺麗であつた。水の底を眺めると、森の中の大木のやうに長い長い枝を突出した怪しげな植物が生ひ茂つてゐる。魚はその梢の上を泳いで出たり入つたりしてゐる。すると、その時一群の白鳥が高い空を飛んでゐたが、その中の一羽は翼が疲れて下へ下へと舞ひ下り、次第に遠ざかつてゆく仲間の白鳥を見送りながら、羽を擴げてゐたけれども、やがてしやぼん玉が風の無い空から落ちて來るやうに降りてきて、水の面に達すると、首を曲げて翼の間に入れてしまつた。その樣子は、波の靜かな海の上に、白い蓮の花が浮んだやうである。

時々風が吹いて小波が立つと、忽ち水の面はきら〳〵輝いた。やがて白鳥は首を上げた。輝く水は青い焰のやうに白鳥の胸や背中へ浴びせかゝつた。すると、その時朝日

が射し渡つた。白鳥は元氣を恢復して身を起し、朝日に向つて仲間の後を逐つかけながら、青い陸の方へ飛んで行つた。溢れる思ひを抱きながらも、寂しく唯一羽波を越えて行つた。

（長田幹彦*）

*小説家

三一　秋草

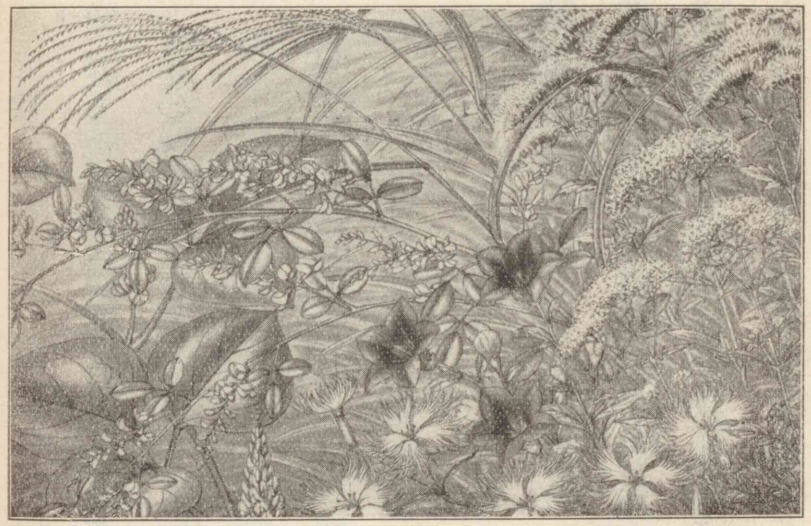
都會でも地方でも、十坪の庭があれば、四季折々の花の姿も眺められよう。秋は殊に優しい花が多く、朝な朝なの露の白玉、夕べは月の光にえもいはぬ風情を添へる。秋草と云へば先づ「秋の七草」から觀なければならない。

七草は、奈良朝時代の詩人、山上憶良が、奈良の郊外、今を盛りと咲き競ふ八千草の中から優にやさしい花のみ數へあげたもので、「萬葉集」の七の卷に收められて居る、

秋の野にさきたる花をおよび折り
かきかぞふれば七くさの花。

萩が花・尾ばな・葛ばな・なでしこの花、
女郎花また藤袴・あさがほの花。

といふ歌に始まる。此の中に詠まれた朝顔の花といふのは、桔梗のことで、桔梗には一重と八重とあり、色には白と紫とある。園藝上からの種類には扇桔梗・仙臺桔梗・絞桔梗・南京桔梗・糸桔梗などがある。花としては八重よりも一重の方が清楚で感じもよい。糸桔梗は極めて可憐なもの、花



秋の七草

も直徑五六分位である。

撫子は高原に見る高嶺撫子・深山撫子がある。薄紅色の河原撫子は殊に風情のある優しいもので、秋の色彩を豐ならしめる。

緣日では四季咲の撫子が、天鵞絨色に開き、西洋物の麝香撫子（カーネーション）は高い匂ひを放つて居る。

萩にも種類が澤山ある。

宮城野、これはその昔宮城野にあつたのを京に移したといふので此の名がある。花の色鮮かに、濃萩は花の色殊に濃く、絲萩は枝細くして花細かに、それから、雀萩は形が小さいので愛らしく、二葉萩はよく繪に描かれる種類である。色から謂へば白と紅で、「伏猪の床」といふ異名も此の花なればこそ一入興味多く聞える。

女郎花は誰も知る花、秋の風に花の搖ぐ風情優しく、白いのは男郎花と呼ぶ。誰が炷き込めたか妙な香を有つ藤袴、葛は薄紅の優しい花、葉にも捨てられぬ風雅はあるが、東京附近には少い。園藝品には奈良の產が珍重されて居る。尾花といふは薄のことである。武藏野の名物は此の尾花

と紫草であるが、今は大方田畠となつて、昔の俤は見るべくもない。尾花の下には「なんばんぎせる」といふ草が生える。尾花の寄生草で昔は思ひぐさと呼ばれて居た。首を傾けて居るから此の名があるのであらう。

此の外にまだ紫苑・龍膽・吾亦紅・玉簪（ギボシユ）花・百日草・孔雀草・嫁菜があり、野菊の種類では紺菊・十五夜菊・達磨菊、夫れ夫れ美しい姿を見せ、十月に入るとコスモス花咲き、雁來紅も色附いて來る。

（金井紫雲）

三二　夕顔

去年遊んだ砂山で、

去年遊んだ子を思ふ。
わかれる僕は船の上、
送るその子は山の上。
船の姿が消えるまで、
白い帽子を振つてたが。
けふ砂山に來て見れば、
さびしい波の音ばかり。

あれほど固い約束を
忘れたものか、死んだのか。

ふと見わたせば、磯かげに
白い帽子が呼ぶやうな。

駈けて下りれば、夕顏の
花がしよんぼり咲いてゐた。

（西條八十）*

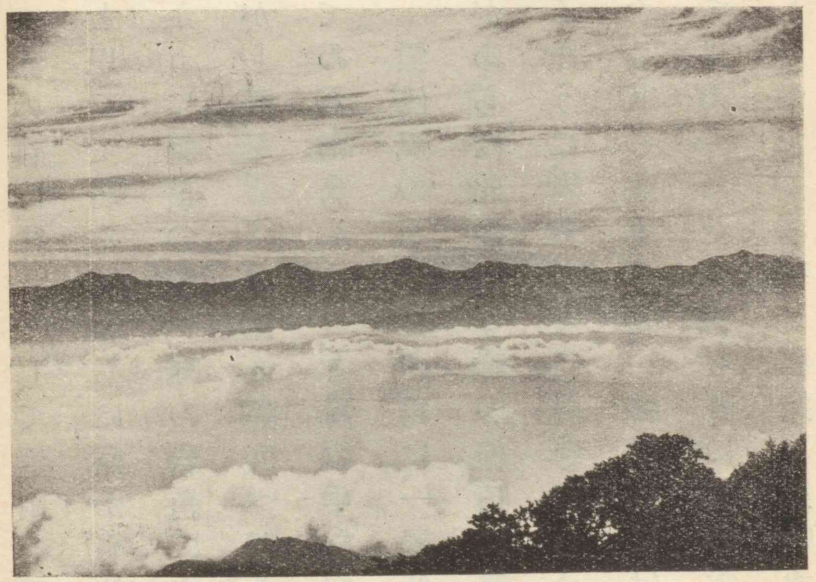
*童謠詩人

三三　絶頂の雲

雲の翼は、徐々として遠山を覆ふやうにして擴つて來た。と思つて居ると、忽ちに谿から怖ろしい風が一陣、どつとばかりに絶頂の劍*ヶ峰の岩角に突進して來た。小石が、がらがら音を立てて深い谿底へ落ちて行く。と、岩の間に隱れてゐた雷鳥が、すつと風の中を突切つて飛んだ。

雲は風の不意打の爲に、一層低く平み着くやうにして、隙があらば此の劍ヶ峰の絶頂に襲つて來ようと待構へて居るやうに、岩角々々に腹を磨らせて匍ひ寄つて來る。默々たる其の襲來の姿。瞬間前にはつい近くの地獄谷を隔てて見えてゐた岩角も、既に其の雲軍の包み隱す所となつてしまつた。右手に稍遠く、黑い水を光らせて居た二つの池

*飛驒・信濃の界にある御嶽の絶頂



雲海

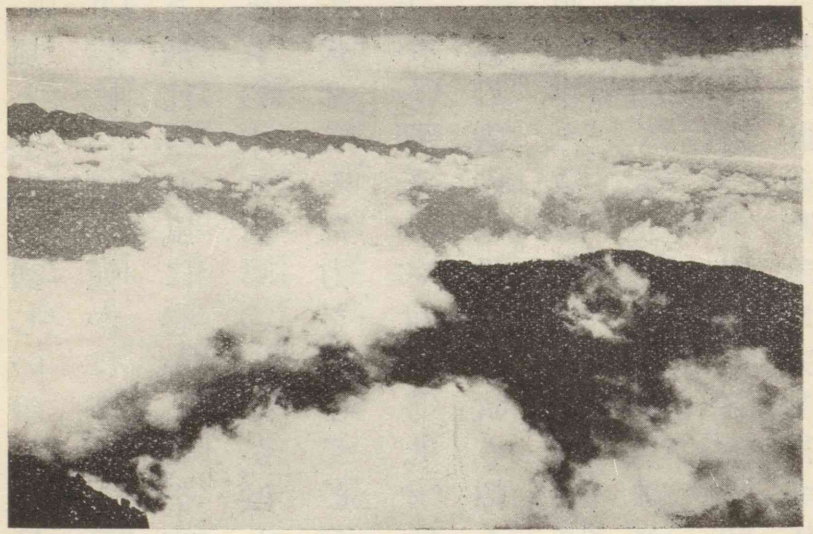
の上にも、逆落しに攻落して來る雲の不思議な手がもう其の水の面まで伸びて來た。四方から攻寄せて來る雲の軍勢――其の中を事々しく、物に取りつかれたやうに行者等の鈴の音が響き渡る。呪文と鈴聲と、此處に一團彼處に一團、白衣の行者どもは集

り集つて、襲ひ來る雲の軍勢を拂ひ除けようとする如く、聲を限りに呼び立てて居る。

が、無言の白き雲軍は、歩一歩地を占め、岩を埋め、谿を覆ひ、刻々に進んで來る。又一陣の風が吹きくると、雲軍の先頭は稍亂れて、右往左往に頭を振つて迷ひ出すが、吹き過ぎた後からは、一層鋭く、稀薄な空氣を突裂いて、一氣に攻寄せて來る。山の背後より偏に攻めてばかり居た雲軍の一隊は、何時か前面に廻つて偃松の上を滑り、砂礫の上を包み、うねうね一列を作つて、下から登つて來る道者の姿を其の中に隱見させて、絶頂目掛けて攻寄せて來る。

風は、始め谷から谷へと吹き入つて、絶頂より少し下を、山

を繞つて吹いて居たが、今は雲の上を壓して、絶頂より遙遠く、直ちに高い天空に吹き去つて行く。其の風の下を雲は這ひつ滑りつ押寄せて、今は只劍ヶ峰の頂上の一角、社の立つ一團の岩を殘すばかりで、全山は雲の中に包まれてしまつた。遠巒も見えず、蒼空も見えず、日光も見えぬ。其の中に陰に籠つた呪文の聲と、澄んだ鈴の音とが響いて居る。さあつ、さあつと鳴る風の音――雲軍を吹き破り、岩角を突崩さんとする冷たい其の風の音はあつても、今は只天地は一帶雲の領である。其の中に包まれて、小さな人の聲も、鈴の響も、風の音も、何ともする事が出來ない。得意な雲軍は總べてを覆ひ包んで、草も木も石も岩も、風までも人までも、



絶頂の雲

あらゆるものを自己の翼の下に收めて、何時までも其の儘に續けて行きさうに見える。

が、風の音は次第に強くなつて來た。上から壓伏せんとする雲軍の重圍を破り、再び自在な自己の天地を見出さんとするやうに、風は次第に吹き募つて來る。

風と雲との烈しい爭。人は其の中に包まれて、岩角に縋り、岩陰に潜み、僅かに呼吸をつないでゐるばかりで、危く吹き飛ばされ、風に卷かれて、千丈の谿底へ轉びさうになる。——と、其の中に雲軍の一端が、はしなく突破られた。風は今まで伏せてゐた力を擧げてどつと吹き出した。雲は慌てて上から押しかぶせようとするが及ばない。風は益〻力を得て、其の雲の破目より吹き捲くる。一軍破るゝと、後から一軍一軍と攻め寄せ攻め寄せて來るが、風は愈〻強く、上に下に、遠く近く、天上までも谿底までも、荒れまはり、狂ひまはつて、雲軍を吹き散らさうとする。

日は此の時急に力を得て、さあつと鋭い光を上から投掛

ける。光は澄んで青白く、純白な雲の頂は、一樣に目覺めたやうに頭を上げて其の光を仰ぐ。人は其の雲の中から息を吐きながら、仰いで此の光を吸込まうとする。天上は紫に輝いて、其の氣高い光は、暫時、この下界の烈しい爭鬪をも忘れしめる。

紫の空は次第に其の領土を擴げて行く。日の光は次第に強く、雲軍は從つて列を長く引いて退きはじめ、天の裾遠く一帶の山の頂が、浮かぶやうに現れて來る。

風は又一しきり勝者の聲を揚げて鳴り渡る。山上の雲は今暫し、姿を亂して四方に散るが、直ちに陣を整へて又絶頂目掛けて攻上る。——かくて果てし無き風と雲との爭。

其の中を呪文の聲を張り上げ、鈴を鳴らして、人は刎飛ばされじと這ひ廻つてゐる。

（吉江孤雁）*

三四　詩四篇

（一）朝

希望と幸福に滿ちた朝、
實に樂しい世界の目覺めよ。
遠いものも近いものも
見渡す限り優美に微妙に、
太陽の光を受けて靜かに目ざめる。

*名は喬松
佛文學者
早稲田大學教授

麗らかな空、麗らかな土地、
どこにも幸福の精がかくれてゐて、
だんだんはつきり澄んで來る。
愛らしい朝、愛に充ちた朝、
清らかで新しく、
世界は惠に滿ちてるやう、
草木の上に、家々の上に、道路に、
清らかな空氣と太陽の光は一ぱいだ。

（二）夜

夜は清らかに
大空は實に靜かだ。

澄みわたる大きな天に
實に小さく清らかな明るい星が、
微かに瞬き、微かに輝きつゝ
靜かな歩みをはこんでゐる。
あゝ、その光の聖さよ。
野には露が下り、
草木は恵に霑ひ、
爽やかな空氣が
晝の暑さを拭つてゐる。
あゝ、夜の神秘よ。
天地は透き徹るやうに

清らかに淨化されてゐる。

（三）空

綺麗な空
實に綺麗な空、
天國が見えるのではないかと思ふ。
餘り靜かで
遠い空、
靜かな輝きが勿體ないやうだ。

（四）海

海が見える。
充溢した歡喜で、

張り詰めたやうな
海面の美しさ、
何と云ふ靜かな力のこもつた海、
永遠の緑を深く湛へて、
盛り上つてゐる海。
日に輝いて純白な帆が
花のやうに流れてゐる。

（千家元麿）*詩人

女子新讀本卷一　終

大正十五年七月五日印刷
大正十五年七月十日發行
大正十五年十月八日訂正再版印刷
大正十五年十月十二日訂正再版發行

女子新讀本

昭和三年度臨時

定價
卷一、二、三、四各金四拾貳錢
卷五、六、七、八各金參拾八錢
卷九、十　各金參拾七錢

定價
卷一、二、三、四　金七拾錢
卷五、六、七、八　金六拾參錢
卷九、十　金六拾壹錢

著者　久松潛一

發行者　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地　佐藤正叟

印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁

（三協印刷株式會社印刷）

發行所　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地　至文堂
振替口座東京二九五〇七番　電話青山（局）三五四六番　四三四三番

弊堂發行の教科書は供給差支無き樣常に澤山製本出來準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます

中央教科書協會
不許複製